

FLORA KANAGAWA

Dec. 15, 1988 No. 25

神奈川県植物誌調査会ニュース 第25号

〒231 横浜市中区南仲通5-60 神奈川県立博物館内

神奈川県植物誌調査会・振替 横浜 3-10195

これが「緑の全戸籍」

「県植物誌」完成

県内に自生する植物のすべてを、9年間かけて調べた神奈川県立博物館の「神奈川県植物誌」(800頁)が完成した。県立博物館の調査員を中心に、市民の協力を得て、地域の植物を調査し、記録し、整理し、刊行された。この植物誌は、県内各地の植物を調査し、記録し、整理し、刊行された。この植物誌は、県内各地の植物を調査し、記録し、整理し、刊行された。

自生2182種 帰化620種

県立博物館 9年かけ調査 主婦ら114人協力

今回の調査で記録された植物の自生植物は千二百十二種、帰化植物は六百二十種、合計が千八百四十二種であった。神奈川県立博物館の調査員を中心に、市民の協力を得て、地域の植物を調査し、記録し、整理し、刊行された。



サトウハチロー

「神奈川県植物誌1988」刊行!

1979年以来、9年間にわたって続けてきた植物分布の調査が、ようやく実を結び、「神奈川県植物誌1988」が刊行された。1400ページを越える大冊であることもさることながら、全部の種類分布図を収録した点で、今までの地方植物誌にない画期的な内容と、各界から好評を頂いたのは、調査に携わった者として、嬉しくまた晴れがましいことであった。

この調査は、スタッフに植物分類の専門家がほとんど居らず、アマチュアとして研究を続けてきた愛好家と、この調査をきっかけにゼロから勉強を始めた主婦等が中心になって進めてきた。センターになったのは、大学ではなく、市民に開かれた施設の博物館であった。このように文字通り市民による植物誌編纂であったことにも、大きな意義が認められるだろう。このことは同時に、得られた情報が今後、県土の自然を守るために生かされるかどうか、市民の活躍の如何にかかっていることを示している。この植物誌が、失われる自然の墓碑銘になることがないように心していきたいものである。

なお、植物誌編纂の原動力であった大場達之先生は、この仕事を最後に千葉県立博物館建設準備室に転勤された。先生の新天地での御活躍をお祈りしたい。

今回調査された植物の自生植物は千二百十二種、帰化植物は六百二十種、合計が千八百四十二種であった。神奈川県立博物館の調査員を中心に、市民の協力を得て、地域の植物を調査し、記録し、整理し、刊行された。



神奈川県立博物館

「又も」 神奈川県立博物館の調査員を中心に、市民の協力を得て、地域の植物を調査し、記録し、整理し、刊行された。この植物誌は、県内各地の植物を調査し、記録し、整理し、刊行された。

今回の調査で記録された植物の自生植物は千二百十二種、帰化植物は六百二十種、合計が千八百四十二種であった。神奈川県立博物館の調査員を中心に、市民の協力を得て、地域の植物を調査し、記録し、整理し、刊行された。

●参加者の声

植物誌の重み

鈴木一喜

標本作りはこのところ手をつけたことがないのに、今度は必ず1点ずつの標本を作るとのことに少しの戸惑いを感じた。自然保護運動の高まりにつれて、一木一草を採集しない態度が広まり、特に三浦半島南部はその焦点になっていたので、採集道具やかさばる野冊を持って、三浦の海岸、山地、田畑を歩き回るのに多少気が引けたが、県博の身分証明書を持って一年も経過すると気後れせず採集して歩くことができた。標本も多くなり、分担区域内の植生がつかめた。しかしまだまだ未知のものがあるだろうと予測され、今後ともフローラカナガワの機関誌を通じて、今回の体験を生かしていきたいものである。

神奈川県植物誌完成の出版記念の集まり、その帰りに手提げ袋に入った植物誌のどっしりとした計量的な重さには少なからず驚いた。しかし、この計量的な重さはそれだけでも素晴らしい本だが、その内容はそれ以上のものだろうと思った。途中で本を開くこともできず、帰宅してからゆっくり取り出してみても、これまた非常な喜びを感じた。頁を繰るごとに、その内容の重さに、たいへん貴重な財産が私に授かったように思った。この植物誌の誕生は、参加された方々の各メッシュ毎の丹念な採集調査の結果だし、専門分野を担当されて、分類統括し、注釈説明、図解その他に学術的にまとめられた努力に感謝したい。恐らく他に類例を見ない、すぐれた植物誌が刊行されたことについて、メッシュ担当者の一人に加えられたことに大変な誇りを持つことになったと今、深く感じている。

大冊を座右に

林 辰雄

どんな形の植物誌ができるのだろうか、多大の関心を持っていた。その神奈川県植物誌が届いて、まず驚いたのは、予想をはるかに越える大冊であったことである。さっそく頁を開いてみて、素晴らしいカラー写真に見とれ、更に頁を繰っていくと、検索表まで載っているのに、思わずヤッター。

書棚にある何冊かの植物誌と比べ、これは座右に置いて、毎日開いてみる価値の高い、植物誌である。ただ、県内にない植物、例えばヤマヒヨドリバナやオオウバユリ等も検索表に載っていればよかったと思う。

短期間にこれだけの大冊をまとめられた、編集に携わった方々のご苦労は、さぞ大変だったろうと感謝しております。

ひるがえって、私の実績を振り返ってみると、担当したメッシュの中でも、気にしながら歩けなかった部分があったのは、悔やまれることであった。楽しかったのは、長谷川さんのワゴン車に乗って、何度か参加した重点調査である。オオクボシダやキクムグラ等、初めて見るものが毎回あって、私にとってはたいへんプラスになった採集行であった。道路脇に腰を下ろし、採集品を新聞紙にはさんだ作業も、今ではよい思い出である。

植物調査会は今後も継続されるという。野外植物に興味を持つ者の交流の場として、この調査会がこれからも活発に活動することを期待しているので、今後の活動方針のようなものを示して頂きたいと思う。

「家に居られない 事情でも・・・」

吉川アサ子

昭和54年3月、神奈川県植物誌調査会の発足を、地元の神奈川新聞紙上で知り、植物を愛する一般からのボランティア参加に応募。

参加はしたものの、「素人に何が出来る」と陰で言われるくらい、素人の上に”ど”がつく程で、分類学の専門用語等の知識はまるでゼロ。

初めは、花の咲くものから、やがて名前の方からないものへと採集が進み、植物図鑑とにらめっこの毎日。片端から採りまくり、周囲の人から「採集の鬼」とも言われた。更に、標本として作成、博物館で同定を受け、整理作業等の活動も続けた。

55年4月、遅々として進まない保土ヶ谷区の調査に、大場先生が特別に出張して下さり、植物と採集のノウハウを直接ご指導を頂き、改めて植

物の難しさと大場先生の偉大さを知り、この一日で勉強したことが、その後の活動に大きな影響を与えてくれた。

58年4月、第1回の合同調査に参加。県西部、北西部地域における採集調査活動を実施。以後、再三にわたり積極的に参加して。その都度同行の各先生から生の指導を受け、自然界と植物についての知識を、少なからず身につける機会に恵まれた。

60年3月、前年に企業を定年退職した主人が調査に同行協力してくれることになり、強力な助っ人に感謝と勇氣百倍。この頃、調査会からの依頼で、遅れている神奈川区の調査を引き受けることになり、併せて西区も応援する。炎天下の採集行で、余りの暑さに、菅田の神明社の境内で休憩し、少し早めの昼食（握り飯）をとっていた時のことだった。通りかかった人が奇異の眼で眺め、「何か家に居られない事情でもおありで・・・」と言われ、早々とその場を引き上げた。熊野堂へ向かう農道脇の芋畑で、テリミハイミチヤナギを発見採集したのはこの日であった。

地理には詳しくても、神奈川区の地図を買い、裏道から道のない藪の中までも調べて歩き、特に羽沢町等は、その日で見きれない場合、翌日再び半分を調べて歩くやり方で徹底的に実施した。暑い夏の日には雨の降る日を選んで歩くこともあり、道を往く人には怪しまれ、お巡りさんには尋問され、放し飼いの猛犬に吠えつかれて往生することも再三あった。どう見ても、採集時の格好はまともではない。買物用の引き車に野冊一杯の雑草を詰め、新聞紙の束をリュックサックに背負った主人と、大きなビニールのゴミ袋に、採集した雑草を入れ、膨らませて持ち歩いているのだから。この調査での収穫は、ツノミオランダフクロを含む341種。また西区は66種を追加提出することができた。

61年5月、1年間神奈川区を採集して、地元保土ヶ谷区が留守がちのため、最後の追込みをかけることにする。

62年6月、主人が発見したオニクサヨシを採集して、ちょうど麦秋を迎え、イネ科の取り残しに弾みがついた。そして、秋に向かって生えるものへの的を絞って活動を進める。区内で1ヶ所どうしても入れない神戸町の旧日本ガラス工場跡地を採集地として選び、この広大な施設撤去後の跡地にどのようにして入るかを検討。管財担当の野村

不動産並びに建設担当の大林組の責任者と会い、即日許可を得ることができた。場内の区域と限られた1時間半ほどの時間内で、ツタノハヒルガオを始め、オニチャガヤツリ、コバノコアカソ等を含む収穫は誠に大であった。それから数日後、一斉に全区域の建設工事が開始され、もう2度と見ることが不可能となり、事前に僅かでも採集できた中に、キラリと光るものがあったことは、幸運だったと思う。あの時に入場を許可してくれた関係者に心より厚く御礼を申し上げたい。これをもって、保土ヶ谷区の調査の終了とした。

この後は、博物館へ連日のように詰めかけ、標本のチェックを手伝い、発刊迄の準備作業を徹力ながらもお手伝いすることができた。

想えば、54年から始め、まる9年間植物とは何かをご指導して下さった、大場先生並びに県立博物館の諸先生、それから植物誌調査会に入会してから知り合った友人、同区内を一時期一緒に歩いてくれた友人、お互いの地区を泊まり掛けや日帰りで採集し手伝いに行き来しあった友人達に、唯ひたすら感謝申し上げる。これらの人間関係を今後とも大切に、神奈川植物誌の更に発展することを望む。合同調査などで得た知識は、私にとっても生涯の財産であり、21世紀を迎えるに当たり、今後も時間の許す限り続けていきたいと思う。

終わりに私事で恐縮だが、女の細腕ながら途中で投げ出さず、くじけず最後までやり遂げられたのは、後ろで支え励まし、協力してくれた主人のおかげであり、心より感謝したい。

変わっていく自然

三輪徳子

茅ヶ崎市の北部にはたくさんの谷戸があった。当調査が始まった1979年以降、私の知るかぎり、九つもの谷戸が産業廃棄物、残灰で埋め立てられた。ラン科；リンドウ科が激減し、オシダ、ジュウモンジンダなどの稀少種が次々と消失した。帰化種が着実に増える。

残された標本の一枚一枚が身近な自然を考える一助になることを願う。



植物誌の活用

山内好孝

検索表を使えば100%植物名が分かり、分布図から植物分布の一般性や特殊性が分かり、これを活用すれば、植物を見つける手がかりがつかめます。こうして見つけた植物は分布図に「・」を打ち、観察月日と観察地を記入しています。例えば、63.7.1に三浦市剣崎で見つけたテンキグサ（ハマニンニク）。植物誌には平塚-3 茅ヶ崎-2、藤沢-3が上げられ、神奈川県のもは砂防目的で植栽されたものに由来するとありますが、剣崎のもは植栽されたものではなさそうです。また、63.7.28三浦市小網代、63.8.28横須賀市吉井で記録したクロムヨウランは、三浦半島では初めてのもので、植物誌では横浜市緑区の1例が報告されています。

植物誌の刊行は、私にとっては楽しい再出発点となりました。

調査の思い出

米山智恵子

88年3月、9年間の調査が先生方により新しい構想でまとめ上げられ、画期的な内容で神奈川県植物誌として出版されました。この調査への参加はボランティア冥利につきました。

ひたむきに草木集めしボランティアの
熱き想いの植物誌成る
百八のメッシュ支えし情熱の
爽りて神奈川県植物誌出ず
未知の花に胸ときめかせ行く山野
九年の春秋短くもあり

84年4月カキラン採集の折の诗情豊かな霧の高原、立ち去り難い想いであった。

ふかぶかと霧のよぎれる高原に
色鮮やかにカキランの咲く

85年9月浜口先生指導、湘南グループと白銀林道を調査。ミシマサイコが咲いていた。初めての出会いは薬草園であった。一瞬鮮やかに蘇ったはち切れんばかりの青春の一こま。はるけくも来つものかな。

野に咲けるミシマサイコに胸あつし
我が青春の思い出の花

85年10月、酒匂川周辺調査、湘南グループ
つややかに穂の立ち揃いしオギススキ

光と風に踊りたわむる

86年5月、守矢先生御指導、湯河原調査。

新緑に天女の衣掛かるがに

ジャケツイバラの花輝けり

87年7月、リョウブ採集の際、何の気兼ねもなくハッスルした楽しかった一時。

白き花一枝欲し嫗らが

投げ縄掛けんと山にはしゃぐ

88年2月、カンアオイ調査の内田先生にお供して、種々勉強、オトメアオイの根のサリチル酸メチル様の匂いと年令の見方を知る。

じっくりと腰を下ろして掘り上げし

オトメアオイの匂いほのかに

ひそやかに年を重ねて八とせなる

オトメアオイの亀甲さえて

主婦業の合間に

齋木操

神奈川県植物誌1988を手にした時、ずっしりとした重さに改めて9年間の歩みを感じた。ただ植物が好きで専門知識がないままに参加させて頂きましたが、湘南ブロックの熱心な会員の方々と、浜口先生の指導力に魅せられて、ひたすら一生懸命ついてきたという次第です。

省みて、9年間もあってどうしてもっと歩けなかったのかと心残りに思ったりしますが、雑事に追われる主婦には、自分の好きな事ばかりはできない悩みもありました。しかし、体力的にも、日々、張りのある楽しい一時期でした。そしてこのような立派な植物誌が刊行されたことは、諸先生方のなみなみならぬ御尽力の賜と感謝の気持ちでございます。記念すべき調査に参加させて頂き、9年間地域の環境変化に驚きながら、自分なりに理解したり、残念に思ったりしながら、減っていく植物を惜しんでおります。また地域を知ることとは、そこに生活している者を心豊かにしてくれます。気になる「マヤラン」も今年は11本でした。ハマカキランには、2種類ありそうということで、今年の6月19日に約120本調べましたが、すべて蜜のたまるタイプでした。これらの気になる植物もこれからの補充調査に参加しながら、見守っていきたいものと思っております。これからも御指導お願いいたします。

調査会に参加して

内藤美知子

調査会に入会して、採集、名前調べ、標本作りなど植物に関わっている時間の長い9年間は、私にとって有意義な毎日でした。また合同調査、勉強会、県博の標本整理の手伝い等にもできるだけ参加しました。そして最後に編集室の雑用の手伝いをさせて頂き、本作りの楽でないことを知りました。12月に入ってからは、年末年始の間休んだのみで、殆ど毎日諸先生方も一生懸命。特に締切日の前日は徹夜で仕事をされた先生もおありとか。時間切れて先生方は、不満足の様にお見受けしましたが、できあがった本を手にした時、私は大変嬉しく思いました。

おぼつかない歩み

山口育子

唯興味があるというだけで何も知らないままお手伝いをはじめて8年、浜口さんはじめ大勢の皆様から沢山のことを教えて頂きながら忙しさを理由にしての不勉強で、今だにおぼつかない歩みを続けています。

それぞれの種の特徴をはっきり記憶していないので、野外での採集の際に他のものと混同して、取るべきものを見過ごしていることも多いのではないかと気になります。

その一方で、たった一本生えていたものを採集したことで、もうその地区にはなくなってしまっ

たということもあります。

特に帰化植物の場合に多く、伊勢原-3のシオザキソウ、大井町のコゴメカゼクサ、在来のものでは大井町のヒナノキンチャクなど記憶に残っています。

これからもポツポツと取り残したものをうめてゆくつもりでおります。

調査に参加して

斎藤滋子

ずしんと重く手ごたえのある植物誌を手にした時、この本を作るお手伝いができたのだと感激ひとしおでした。直接「神奈川県植物誌」作成に当たられた諸先生方の御苦労、御努力に感謝申し上げます。

一口に九年とは申しますものの、振り返ってみますと、本当に長い年月でした。わが家の歴史の中では、当時高校生だった娘が嫁に行きました。また、一生懸命歩いた調査地のいくつかは、なくなってしまい自然が失われて行きました。

今年に入り、茅ヶ崎で唯一残された谷戸の自然を残そうと仲間達と運動を始めましたが、これも、調査会に入り勉強させて頂き、自然の大事さを学んだからなのです。どの様な結果を迎えるかわかりませんが大昔から残っている植生を取り入れた「自然教育園」の構想を持って、守り続けて行きたいと思っています。

● 各地の先生方より 1

植物誌をお送りした、専門家の諸先生方から、暖かいお祝いの言葉が県立博物館や調査会に寄せられています。そのいくつかをご紹介します。

・長田武正先生

この度は全く思いがけなく「神奈川県植物誌」を御恵与下さいましてありがとうございます。拝見致しまして、その膨大かつ周到に編纂されて居られます内容に、ただただ驚嘆致しております。かって小生も2年ほど横須賀に住んで居りましたので、故松野重太郎先生が中心となって作られました「神奈川県植物目録」は、当時の小生の勉強の唯一の指針でございました。それがこのような大著に発展しようとは思ひもかけぬことでありました。

単なる植物リストではなく、それぞれの種についての簡明な特徴はまことに良くとらえられており、地域別分布図並びにイラストと共に、他県在住者にとってもまことに良い参考資料になります。

その上頒布価格も驚くほど安く、驚くことばかりでございます。厚く御礼申し上げます。

・浅野貞夫先生

実に見事な神奈川県植物誌をお届けいただきまして厚くお礼を申し上げます。長年にわたる熱心な研究者の皆様のお心労と御協力の結果が立派に結実しました訳でございますね。貴重な研究物と存じます。厚く御礼と感謝を心から申し上げます。

● 執筆を終えて

より充実した標本の蓄積を

初山泰一

神奈川県植物誌1988年版、この本はおおぜいの方々の労作である。実地の観察にもとづく成果がちりばめられていて、教わることがきわめて多い。教わったことを、さらに裏付けの標本で勉強したく思い、横浜におじゃますることがある。そして、この次にすることは何だろうと思うことがある。その一つは標本の整備である。採られた標本は整然と整理されてはいるが（これは大変なご苦労だったろうと思う）、何分にも新聞紙にはさんだまま、仮のカバーなので、見易いというわけにはいかない。葉だけで、花も実もない標本もたくさんある（これは種類を集めるためには適切な処置であった。私は、山で花や実ばかりを求めて、葉だけのものはその季節にとりおとした）。しかし、標本室としては、花や実の標本を揃えたい。質の向上を心がけたい。これは出版後の仕事の一つであり、これにも多くの方々の協力と標本室には城川さんのようなよい方のおいでになることが必要である。1500ページもの本の中に、まだ何が書いてあるか分からない。これからも勉強させて頂きたいと思えます。

失われる自然を見つめて

小林純子

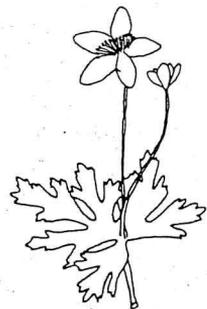
家の裏には滑川が流れていて、十二所の奥に端を発し、相模湾に注いでいる。川は浅く、小海老やハゼが泳ぎ、鰻が穴に隠れ、川面にはミズズマンが滑走し、キセキレイやハグロトンボ、ヤンマなどが水面すれすれに飛び交っていた。川向こうには森と山があり、森にはニリンソウ、フタリシズカ、リンドウ、ホウチャクソウ、ジュンランが咲き、山道の両側にはベニシダ、リョウメンシダ、ヤマイタチシダなど暖地性のシダ類に交じってスマイレ、タンポポ、ツルカノコソウ、キランソウなどが咲き乱れ、四季折々の野外観察や摘み草には事欠かなかった。小鳥達も森で天然の交響曲を奏でていた。〈1930年代～1940年代前半〉

1940年代半ばから第2次世界大戦が激しくなり、花を愛でるよりも、飢えを満たすために食べられる野草を採る方が忙しくなり、アカザ、フキ、ツクシ、セリ、ミツバを探し、ツルナを求めて海岸まで歩いて、海草や海水まで採集してきたこともある。その頃はまだ海浜も広く、松林もあって海浜植物も多数あり、食べられなくても、それを見て新しい発見をすることで、飢えた心が満たされる気がした。〈1940年代後半～1950年代前半〉

終戦後、朝比奈に切り通しが開通し、鎌倉にどっと疎開者が増えてから様相は一変した。瞬間にブルドーザーが山を崩し、森を開き、可憐な花を押しつぶして、家々が立ち並んだ。場所を決めてすみついていた多くの植物が、侵入して来る帰化植物に追われて、消えていった。〈1950年代後半～1960年代〉

1970年代初め、私は「かながわの自然」にこの自然破壊の現状を訴えた。「神奈川県植物誌1988」が発足したのが1979年春。自然破壊の速度はあまりにも早く、私にはこの仕事のために打ち込める時間が余りにも少なかった。人間の飽くことのない発展への欲望が、宇宙の和を破壊し、人間を含めた生物（命）を滅亡に追いやりつつある現実には絶望しながらも、私に残された唯一の救いは、植物は何百年も生きて、地球の歴史を語ってくれるという真実である。

よく管理された証拠品と、真実を見きわめようとする眼と心がある限り、私にも次の10年のサイクルの中のいくばくかを“パルテノン”のよりよい改築に参加させていただける資格があることを期待し、大場、高橋両氏を始め、この仕事に全力投球された皆々様の労を謝したいと思います。



ふりかえって

城川四郎

丹沢山、蛭ヶ岳、檜洞丸、犬越路、大室山の丹沢主稜の北側1000m以上（津久井1、津久井2）を分担して、毎年平均10回は歩いてきた。調査会開始以前から丹沢はほぼ毎年同じ調子で歩いてきたとはいうものの、丹沢の北側だけの分担は大変なことだった。当時、津久井にいた高橋節郎さんに半原まで車で迎えに来てもらい、早戸川原小屋沢を遡行して姫次岳を通り、大平に下ってから厚木まで送ってもらうとか、大森庄司さんも加わって大滝沢を遡行し、丹沢山へ出て焼山経由で青野原へ下り、厚木まで送ってもらう等の強行軍を、日曜ごとに繰り返したものだ。現職にあり人生最も多忙な時期だったので、ひとしお感慨深い。

執筆を担当しているいろいろ不勉強が身にしみだが、特に閉口したのは図である。当初の計画段階では分類上の要点を図示する程度と理解していたので、描きためていた図もないままに原稿を書き始めた。しかし、他の執筆者の豊富な素晴らしい図を見せて頂いて、描かない訳にはいかないものと覚悟した。結局、原稿の検討や校正をしなければならぬ時間をさいて、標本からの描画に追われた。下手くそが秒読みに追われて描くのである。お粗末と指摘を受けてもしかたがない。本人が一番よく承知していることである。

植物誌完成にあたって

秋山 守

昭和52年頃、横浜植物会の村上、守矢先生方と神奈川県植物誌について雑談したことがある。1958年に出版された植物誌は絶版で入手が難しく、発刊以来20年近く経つし、この間には分類学の進歩や開発による植物相の変遷を知る上でも消滅したものは削除し、新たに発見されたものを補って、改訂版の発行が出来ないものだろうかという内容だった。幸い、県立博物館の高橋、大場先生を中心に県下の植物好きな同好の士が集まって植物誌調査会が発足したのは、54年3月21日であった。

以来、9年の歳月を経て63年3月15日に「神奈川県植物誌1988」というユニークな植物誌が刊行されたことは、その仕事に携わった者として、喜ばしい限りである。しかし、心残りも多々

ある。まず最初に上げなければならない種にクラマゴケ属のエゾノヒメクラマゴケがある。タチクラマゴケによく似ているため、今まで見落としていたシダである。国立科学博物館の中池敏之博士に貴重な指摘を受けたので、詳しく観察した結果、正しくエゾノヒメクラマゴケとすべきものが見つかった。タチクラマゴケの腹葉は広卵形、鋭頭、長さ2-2.5mm、エゾノヒメクラマゴケの腹葉は卵形または卵状楕円形、鈍頭、長さ1.5mmである。私の手元には、丹沢ユースン（1960.6.4）、丹沢塔ヶ岳（1963.6.16）、玄倉林道（1988.6.11勝山輝男）の標本がある。

なお、綾瀬地域に分布しているニワホコリ、カヤツリグサ、ヤブラン、スベリヒユ、コブシ、サネカズラ、ネムノキ、ハリエンジュ、カラスノゴマ等数十種の標本が未提出のため、分布図から脱落し、わが家に眠ってしまったのは、心残りも大である。

心残りはあるが

村上 司郎

今回の植物誌1988の執筆については、私自身反省することしきりである。

とにかく皆さんからお叱りを受けそうだが、この植物誌がどういう内容になるのか、どうも理解が不十分だったようで、従って県内産の各植物の解説についても、こんなに皆さん競って丁寧におやりになるとは思ってもみなかった。しかも、編集が追込みに入った大切な時期に海外へ出かけたなりして、熱心な編集の方々にご迷惑をかけたなりした。

さらに植物研究史の方も、明治以前担当の小原先生は各種の資料にあたり、情熱を傾けて執筆されたのに対し、私自身は研究史というものを書くのが初めてで、しかも現役の研究家の業績ということで、どうバランスをとるかに苦慮し、小原先生に比し、お粗末きわまる内容となった。まことに申し訳なしである。

採集を担当した横浜地区も、かなり歩いたつもりだが、十分とはいえず、すでに数人の方から分布図への記載漏れの御指摘を受けている。

あれやこれやで、悔いの残ることばかりである。

植物誌発刊に思う

長谷川義人

今回の事業は標本の収集と整理にその基礎があったと思う。多くの調査員諸氏がそれぞれの地域を踏査された、楽しく、辛い日々の努力が結晶したものであって、春夏秋冬、片雲の風に誘われ、山野に飛び出したこの静かな情熱の凝集がなければ、植物誌は完成しなかったのである。執筆に際し、これらの集積された資料がどれほど役立つかは計り知れない。一枚一枚の標本に記された御芳名は、私に深い畏敬の念を抱かせたものである。更に、事務局の皆様の献身的な努力も特段に評価されねばならない。

私にとっては合同調査が、思い出深く、個人で歩くのとは異なった連帯を感じる機会であった。種数の上がらない地域を回って、暑熱や雨中もいとわず、早朝から日没まで採集を決行したのである。

美しい日本の風土の中にあつて、神奈川県風の風土もまた、美しいはずである。しかし、残念なことに平地は「国栄えて山河なし」の状況であった。我々の心のよりどころであるこの風土を、これ程ないがしろにしてきた人口集中という魔物は日本人の自然を観照する心をもむしばんでいると思われる。しかし、天の救いか、周辺山々はその原形を保持して、そこでの原住植物の生存は心強いばかりである。

能の世阿彌の言葉に「花なくては萎れ所無益なり」があるが、今回の事業に参加された方々は人生の中で決して短い歳月ではなかったこの時期の記憶を「得難い花」として、これから美しく過ごされることと思う。

今後の課題として、分類学上難度の高いグループを研究する方向があり、これは調査会の共同研究テーマとして取り上げることとなる。再び集う日々があることを希求するものである。

調査と執筆をふりかえって

諏訪哲夫

昭和54年、植物誌調査会がスタートした時、採集経験はあったものの、ずぶの素人の私はお誘いを受けても躊躇していた。ところが座間市が期を一にして植物調査を始めることになり、地元の高校勤務の私はとうとう断わり切れず、まとめ役まで押しつけられてしまった。この調査は4年継

続し、58年3月に報告書「座間の植物」を刊行して一段落した。報告書は、データベースとして活用されるようにまとめたつもりである。標本は市の資料館とともに、県立博物館へも収蔵したので、県植物誌資料としても役立つことになった。また、結果的にこの調査は、市の中心部にある谷戸山30ヘクタールを県立公園として保存する糸口になった。

この後、私は厚木-1(荻野地区)の調査と、県央ブロックのまとめ役をさせて頂き、ミズニラ・ハマハナヤスリ・アマクサシダ・イブキシダ・リュウノヒゲモ・サガミトリゲモ・ワダソウ・タチネコハギなどの稀少種とも出会った。

全県の標本を点検したのは、ユリ科を除くツククサ科からジャクジョウソウ科まで、イトホソイの標本をはっきり識別するには、だいぶ苦勞した。ヒナノジャクジョウは今回の調査では未記録で、過去の記録も標本がなく、愛知県産の標本をもとに図を描いた。

私にとっては、忙しくはあったが充実した9年間であった。

新たな観察と研究のために

山本 明

長い年月をかけた植物誌が完成した喜びは、何ものにも替えがたいほどに大きいのですが、私はこの植物誌を土台として、各方面で観察や研究が一層進められていくことの意義は、また計り知れないものがあると思います。

昨年秋から大和市でも動植物の総合調査が始まりました。私もお手伝いをしていますが、調査の結果をこの植物誌で検討できますことは大変ありがたいことです。私の机の上に広げられた植物誌は、毎日使っているので、もうだいぶ標本のゴミなどがついて汚れてきました。どのページを開きましても、多くの方々の協力でつくりあげられた本の重みを感じると共に、余白に観察のメモを書き込むことで、この本を活用させて頂いているという実感がわいてきて、改めて感謝申し上げている次第です。

この植物誌が将来、増補、改訂が何回となく行われて、より完べきなものになるよう、心から願っております。

脳裏に浮かぶこと

守矢淳一

神奈川県植物誌調査会が発足してより9年、他県に例を見ない立派な植物誌を手にした時、この長い間の調査活動での様々な思い出が、一瞬間に次々と私の脳裏に浮かび上がってきた。

・私の教員生活最後の2年間に始まって、定年退職、県立青少年の家への再就職、続いて地域の町内会長、連合会長、社協会長と、仕事と雑用に追われた中での調査活動であったこと。

・最初の間の花や実のついた完全標本も、調査が進むに従って、種類を追う、不完全標本になってしまったこと。

・分布調査を行ったことが、植物分類の勉強になったこと。

・丹沢・大山から相模湾にいたる間の、豊富な自然環境・人為環境における植物の調査観察のよい機会になったこと。

・81年11月、秦野2での勉強会の折、参加者の協力により、一挙に3百数十種が採集されたことで、合同調査の威力がわかったこと。

・メッシュやブロック内で、また県内で初めての植物を採集した時の喜びの数々。

・シダ植物の約3分の1の執筆担当をしたものの、勉強不足から、属から種への検索表や種の解説など、欠点だらけのものとなってしまったこと。

・合同調査で、または博物館内での標本整理の中で知り合った多くの方々との出会いの数々。

・高橋先生、大場先生、城川先生はじめ多くの先

生方よりご指導を受けた、今も記憶に残る一つ一つの場面。

・県立博物館の植物誌編集室での先生方を始め、会員の皆さんの、夜を徹しての完全版下の作成の姿等々。

藤沢の植物を調べて

根本 平

都市化の波に洗われ、衰退の一途をたどる植生であるが、他区の皆様の協力を頂き、当市の植物は変・品種を含めて1037種類を数えることが出来た。なお、今回の植物誌への記載遅れ、記載もれが各メッシュでかなりあり、これへの対処が今後の課題である。藤沢市内全区の提出もれ、取りこぼしは下記の通り。

フユノハナワラビ・ギフベニシダ・デンジソウ・モウソウチク・ハチジョウススキ・カタバエノコロ・アメリカスズメノヒエ・ハルガヤ・ネズミムギ・アゼテンツキ・ヌカスゲ・ナツズイセン・クマガイソウ・タチヤナギ・マグワ・トウゴクヤブマオ・メヤブマオ・サナエタデ・カワラアカザ・アカザ・ハイビユ・ハマナデシコ・オオヤマフスマ・サラシナショウマ・オオバタネツケバナ・オカタイトゴメ・タチオランダゲンゲ・コシナガワハギ・ヤブマオ・ヒメユズリハ・ニシキソウ・ヤマハゼ・ボダイジュ・アゼオトギリ・ナワシログミ・ホソバヒメミソハギ・オカウコギ・マメガキ・マルバアオダモ・アケボノソウ・ツルニチニチソウ・アブノメ・ヒメヒマワリ・ヒメガンクビソウ (以上44種類)

≡≡≡・各地の先生方より 2

・今関六也先生

此度は誠に素晴らしい御業績「神奈川県植物誌1988」を御恵贈にあずかり、筆舌に尽くせぬ感謝感激の心をこめて、厚く御礼申し上げます。御高著は博物館の本命ともいふべきもの、県立自然史博物館の健全な発展をこい願う小生として、こんなに喜ばしいことはありません。

九年余にわたって一糸乱れぬチームワークをもって、この大仕事を成就された高橋、大場両氏を始め、百名を越える館外協力者の各位に満腔の敬意と謝意を表する次第です。大変簡単ですがとりあえず御礼申し上げます。

・田村道夫先生

この度は「神奈川県植物誌1988」を御恵与いただき、有難うございました。厚く御礼申し上げます。県内分布、種の拾い方など極めて精密で、多く出版された地方植物誌のうちで最高のものと存じます。多くの人々の努力の結果と敬意を表します。神奈川県植物のより深い調査研究のため、益々御精励され、さらに多くの成果が上がることを御期待申し上げます。

・橋本保先生

このたびは「神奈川県植物誌1988」を御恵送下さり、まことにありがとうございました。地方植物誌刊行史上に残る立派な御事業を成し遂げられたことに敬服いたしました。

植物誌に思う

大森雄治

・記載文を書いて

今回植物の記載をしていて気が付いたことは、これまでの記載で形や色を表す言葉が曖昧なことでした。たとえば立体を表現する必要があるのに平面を表現する言葉を用いていることなどです。色も表記が統一されておらず表現に迷いました。また形態の観察そのものが不十分で、たとえば樹皮や果実、冬芽の形などまだまだ調べることがたくさんあると思いました。さらに生態学的な記述に関しては開花期など残された問題が多くいずれもこれからの課題です。

・つぎの植物誌に

ある日の植物誌編集会議後の雑談の中で、記載文中に、その植物がどんな昆虫に食われるのかなども記録しようという案がありました。今度の植物誌では実現はしませんでした。これからの調査に、「植物だけ」から少しばかり興味を広げてみてはいかがでしょう。

その葉をどんな虫が食っていたか、その花にどんな虫がやってきたか、その実はどんな鳥が食っていたか、その根ぎわにはどんなキノコが生えていたか、などをたとえメモ程度であっても採集記録に加えると、植物を中心として動物や菌類が互いにどのような関わりをもって暮らしているのか、今まではほとんど未知の分野の展望が開けます。そんな生態的な記述を種類毎に盛り込むことができればさらにももしろい植物誌になるでしょう。

最近子ども向けのものですら見事な生態写真や詳しい挿絵のついた図鑑が出回っていて、けっこう役に立ちます。わからないものはそれこそ博物館を利用してください。

・植物誌と博物館活動

今回の植物誌のように現在の植物分布の正確で詳しい記録（地域的・時間的にまとまった標本）は、自然環境の変遷をたどったり人間生活と植物との関わりを考える上で欠かせません。またそれはこれまで断片的ながら蓄積されてきた過去の資料をも生かします。さらに植物と他の生物との相互関係を調べ、広く生態系を理解するにも欠かせないでしょう。

残念ながら、これまでの「博物館」という言葉は古くさい資料と、かわりばえのしない展示というありがたくない連想を多くの人に与えてきたようです。しかし、この植物誌を見、その調査の過程を知ってもらえれば、博物館とその活動が見直され、博物館資料の大切さを再認識してもらえるのではないかと思います。博物館に勤めるものの一人として、調査や編集に携わった方々にこの場を借りて感謝します。

裸子植物あれこれ

早川亮太

裸子植物のまとめの作業にあたり、気がかりになったことを二つほど。

まず、植物誌の使命から見て、植栽された樹木を分布に加えることは、厳に避けなければいけないことはいうまでもないが、例えば植栽されたナギの付近の自然状態の林中に、実生で育ったナギが点々と見られる場合、これをフローラに加えてよいか、という問題が出てくる。これがその後数代にわたり自然繁殖を繰り返す、すっかりその地域に定着した場合には、自生と見なして異論がない、と考えるが、ライフサイクルが長い樹木ではその見極めが容易でない。イチョウ、イヌマキ、マツ類、スギ、ヒノキ、サワラ、アスナロ、イブキ等、裸子植物には栽培樹種が多く、これらの木を目前にしても、栽植したものか、逸出後自生したものかの判断がつかない場合が往々にしてある。まして、紙に挟まれた一枝の標本からでは判定しようがない。今回、そのいくつかは採集者に問い合わせて採否の決定ができたが、大多数の標本は半信半疑のまま自生として採用し、一部のものは独断で除外した。ただし、その根拠はいたってあいまいで、割り切れない思いがしている。他県の植物誌を見ても、この辺の取扱は統一を欠くようであるが、今後このような問題についてのマニュアルの確立が望まれる。

次に過去の文献（林弥栄ら1961以前）で、神奈川県下の産地まで明記してあるシラビソ、マツハダ（イラモミ）、トウヒ、クロベの4種の標本が最後まで入らなかった。産地は主として丹沢山塊の高地であるが、この方面を歩かれる方（私は体力的に絶望）にはぜひ御協力をお願いしたい。

神奈川県植物研究史(1)余録

小原 敬

「神奈川県植物誌1988」の研究史は、最初当県植物のエキスパートである大谷茂先生が御執筆になる予定であったが、昭和56年1月24日逝去されたので、急遽浅学非才の私が担当することになった。ところが昭和60年春に頸椎症を患い、翌61年に定年退職し、職場に置いてあった書籍類を倉庫に預けたので、最悪の条件で執筆しなければならなかった。それで、手馴らしに「茅ヶ崎を通過した植物研究者達」(はまかきらん No.5, 1986)を書いてみたりした。

研究史は所詮は鉄と糊で構成することになるのだが、編集方針としては政治経済情勢の影響にも触れ、来日外人植物研究者の相互関係、また彼らと邦人本草家との絡み合いにも留意することにした。また取り扱う範囲は高等植物以外に下等植物にも軽く触れた。それは将来、当県の下等植物誌の出版を待望するからであり、その時に多少は参考になると思ったからである。

さて、シーボルト事件は知識欲に燃えた彼らが熱心の余り暴走したことが原因だと思われる。平賀源内は「ヨンストン動物図説」を家財道具を処分して購入し、また宇田川榕菴はわが国最初の化学書「舎密開宗(せいみかいそう)」を著す時、「蘇氏舎密」などを入手するため蓄えを殆ど注ぎ込み、妻の花かんざしなども総て入質している。私達凡人にはなかなかまねができないことである。植物誌刊行の目的は学術的なこともさることながら植物に関心を持ち、慈しむ心を育てはぐくむこともその一つだと思われる。また植物史の目的は先人の植物学研究に対する真摯な精神に触れ、啓発を受けることもその一つだと思われる。だが、紙面の都合で、それらの事例を多く挙げることはできなかった。

初めは県内の各市町村史にも目を通したいと思っていたが、時間的にも体力的にもできなかった。また植物研究史の資料の収集も十分には捗らなかった。わが国の自然史系研究施設の図書収蔵は未だ完全とは言えないので十分考証できなかったこともある。

最も難渋したのはクライエルが報告している日本産植物名と新編相模風土記稿中の植物名で、大場達之、松浦正郎両先生にも御教示頂いた。

特にこの風土記稿に登載の「神馬藻」には手こずった。牧野日本植物図鑑の漢名索引になく、広辞苑では独立項目でなく「ほんだわら」の条下に併記されていたり、諸橋大漢和辞典を索くとき誤って「軍馬藻」で搜したこと、また風土記稿には先に「馬尾藻」が出ており「ホンダワラ」ではないだろうという先入観があったことなどのためになかなか判らなかつた。北村：本草の植物、木村：図説草木辞苑、貝原益軒：大和本草などを購入して調べたが見つからない。ところが、ある日なんの気なしに牧野図鑑の和名索引を索くとちゃんと出ていて、「ほんだはら・はたはら・じんばそう・古名なのりそ」ということが判った。大和本草によれば「なのりそ」を「な乗りそ」に掛け「神馬に乗ることなかれ」と解し、「神馬藻」と名付けたと記している。なお、阪田敏子さん(茅ヶ崎植物会)によれば、新潟県ではホンダワラの先端を摘んで食用とし、「ジバサ」と呼んでいるという。この「ジバサ」は「神馬藻」が訛ったものと推定される。

宇田川榕菴は文政8年6月藤井威斎、山本丹岳と高尾山、富士山に登り、相模を巡検している。また彼の漢方の師能条保菴(?-1826)は伊勢原の人である。このように書き漏らした事項も多い。また使用した辞典などの間違いをそのまま引用した箇所も散見される。将来これらの誤りも訂正していきたい。

神奈川県立博物館で県内産植物の原記載と関連植物研究者の肖像写真の収集をして下さると非常に助かると思う。

東京大学金井圓(まどか)先生はクライエルの資料を貸与下さり、また中尾真弓さんはペーパーについて御教示下さり、写真を調達して下さいました。県植物誌のまとめに当たられた各位にはいろいろご迷惑をかけました。これらの方々には深い謝意を捧げます。

<小原先生は「日本の生物」(文一総合出版発行の月刊誌)に外国人による日本の植物研究の歴史について連載を始められました。>



Engelbert Kaempfer (1651-1716)

●植物誌ができるまで

「神奈川県植物誌1988」

刊行の経緯

城川四郎

(1) 胎動

1978年、横浜植物会の役員の間では神奈川県植物誌(1958年版)の改訂版のようなものの作成について話題が出始めていた。すでに役員の一守矢淳一先生は10年余の調査を終えて、平塚市の野外植物目録をまとめる段階になっており、このことが横浜植物会で植物誌の改訂が話題に上る誘発剤になったようである。横浜植物会の村上会長は、この話題を県立博物館の高橋、大場両先生の許へ相談に持ち込んだのである。

県立博物館ではその頃、生出智哉氏が事務局担当として神奈川県キノコの会が発足し、新聞にも紹介され、県民の反応もかなり賑やかであった。これは県民参加の植物調査を考える場合の一つの暗示ともなった。高橋、大場両先生は県民参加の植物調査と、それによって精度の高い植物分布図が作れないかと模索していたからである。村上会長の植物誌改訂の話題は、高橋、大場先生の模索を一挙に具体的現実論へと飛躍させた。こうして、大場先生一流の緻密な調査計画と植物誌編纂の構想が始動することとなった。

(2) 植物誌調査会の組織と運営

1979年2月17日には「新神奈川県植物誌(仮称)調査会発足世話人」の招集で、発足準備会が県立博物館応接室で開かれた。神奈川県植物誌編纂事業に向かった組織的活動の第一歩である。ここで大場先生が提示した事業案を再録してみよう。

◎新神奈川県植物誌編さん事業案

- ・まず維管束植物について
- ・他県に例を見ないユニークな、高度な内容を持つ植物誌を調査刊行する。
- ・次の2項に分かつ

a. 神奈川県植物誌資料編

文献：神奈川県植物誌に関連のあるすべての文献を目録としてまとめる。

基準標本：神奈川県を基準産地とするTaxaの基

準標本の所在を調査し、その写真を集成する。
分布と目録：文献および日本の主要さく葉庫の標本の中から、神奈川県産のものを抽出し、これまでに神奈川県に記録のあった維管束植物をすべて目録にまとめる。

研究史：上記の資料をもとに神奈川県植物研究史を編纂する。

b. 神奈川県植物誌分布編

調査期間(3~5年)内に神奈川県内に実際に確認された維管束植物の目録と分布図を集成する。

メッシュ：神奈川県を古来からの自然村(字)を基準として100~150のメッシュ(ほぼ1/25,000地形図4等分に相当)に区切り、各メッシュ内に現在生じている植物をすべて記録し、各種ごとの全県分布図に集成する。この作業は同時に各市区町村の植物誌調査にもなる。
標本：記録された植物は原則としてすべて標本として保存し、公開の博物館などに保存し、後代の利用と再検に役立てる。

c. 調査期間

本年3月より調査を開始し、3ヶ年をもって仮目録、仮分布図を印刷頒布し、不足補充、訂正を行って5ヶ年目に印刷、刊行

d. 調査分担

- ・県内の植物同好者を主体とする。
- ・調査員は各2~5のメッシュを分担する。
- ・それとは別に研究史、文献、分類群(シダ類、科など)の責任分担を定める。同定困難な群については専門家に依頼する。

e. 費用

当初は調査員自弁とするが少なくとも2年度以降は県の補助金を受けられるようにする。

f. 連絡誌・ゼミナールなど

- ・調査員の情報交換、文献資料の紹介などに役立てるため連絡誌(季刊くらい)を考える。
- ・専門家を招いて特定の分類群(例えばイネ科、イノデ属など)についてのゼミナールを行い、調査能力を高める。

g. 只今刊行中の「神奈川県史」がまもなく完了するが、それに引き続いて「神奈川県自然誌」の編纂を呼掛け、その中の1冊(或は2冊)として調査刊行されることも考える。

上記の雄大緻密な計画は神奈川新聞にも発表され、有志を募り植物誌調査会の組織作りが進められた。そして、1979年3月21日には神奈川県植物誌調査会の発会総会が行われたのである。このときの会員構成は横浜・川崎地区64名、三浦地区26名、湘南地区15名、県西地区4名、県央地区15名、県北地区5名で合計129名であった。引続き入会者も多く、それから1カ月も経たない内に40名の追加会員を得て、1979年4月13日には169名の会員名簿を作成した。調査会の運営は、県立博物館におかれた事務局が中心になって進め、年数回開かれた役員会で、調査と資料整理の方法や執筆内容と分担等が検討された。

実際の調査は、県内を108のメッシュに分けて行われることになったが、地域的な単位として、横浜北川崎（森茂弥）・横浜南（村上司郎）・三浦（石綿治一・鈴木一喜）・鎌倉（小林純子）・湘南（守矢淳一）・県北（城川四郎）・県央（秋山守・高橋秀男）・西湖（松浦正郎）の8ブロック（カッコ内は発足当時の代表者）に分

かれ、それぞれのブロックでメッシュ担当者が連絡をとりあいながら、進める形をとった。横浜、三浦、湘南はそれぞれ鶴見高校及び県立博、横須賀市博、平塚市博が活動拠点となり、また県央は諏訪哲夫先生の尽力でまとまった活動を行うことができた。しかし、調査員の数が少なく、しかも活動の拠点のない県北と、西湖は実質的にはブロックとしてのまとまりを持った活動が難しく、県立博物館のセンターで統括する形になっていった。

植物誌調査の根幹である野外調査は、県内108メッシュの各担当者が自発的に行ったが、それが最初から最後まで手弁当のボランティアとして進められたことは、明記しておきたいことである。9年間の調査が、事故やトラブルがなく無事に終わったことも、幸いなことであった。

また、分布調査の他に調査会として取り組んだ調査に「神奈川の春はどこから来るか」と題した開花季節調査がある。これは、1985年と86年の春に行われ、結果は植物誌の1章としてまとめられている。1987年5月にはミズキの開花

植物の「戸籍」作り

五年がかり、全県アミの目に

「あなたも協力を」

調査会作って呼びかけ

「植物の戸籍作り」は、神奈川県植物誌調査会が中心となって進められている。この調査は、県内を108のメッシュに分けて行われる。このメッシュとは、縦横100メートル程度の正方形の区画を指す。このメッシュごとに担当者が割り当てられ、そのメッシュ内にどのような植物が生えているかを調査する。調査の結果は、植物誌に掲載される。この調査は、県民の協力によって進められている。調査会では、調査の方法や資料整理の方法などを指導している。また、調査会の活動は、県立博物館のセンターで統括されている。この調査は、県民の協力によって進められている。調査会では、調査の方法や資料整理の方法などを指導している。また、調査会の活動は、県立博物館のセンターで統括されている。

この調査は、県内を108のメッシュに分けて行われる。このメッシュとは、縦横100メートル程度の正方形の区画を指す。このメッシュごとに担当者が割り当てられ、そのメッシュ内にどのような植物が生えているかを調査する。調査の結果は、植物誌に掲載される。この調査は、県民の協力によって進められている。調査会では、調査の方法や資料整理の方法などを指導している。また、調査会の活動は、県立博物館のセンターで統括されている。この調査は、県民の協力によって進められている。調査会では、調査の方法や資料整理の方法などを指導している。また、調査会の活動は、県立博物館のセンターで統括されている。

読売新聞 横浜版
(1979.3.21) 調査開始時

調査を行った。

座間市では、植物誌調査と並行して市内の植物分布調査が行われ「座間の植物」が刊行された。平塚市博物館では、湘南ブロックのまとめとして「湘南植物誌1～3」が刊行された。

なお、調査を進めるにあたっては、多くの方々や関係機関にお世話になったが、それらについては植物誌本編を参照して頂きたい。

以上のような形で進められた調査会の歩みを、総会を中心に年譜としてまとめると、下記のようなことになる。

- 1979.3.21 調査会設立総会（県立博物館）
 - 4.10 機関誌「FLORA KANAGAWA」発刊
 - 4.13 横浜南地区で第1回ブロック別調査
 - 6.3 第1回植物研究講座が県博で開催
- 1980.1.27 第2回総会（県立博物館）
- 1981.1.24 大谷茂先生81才で逝去
 - 3. 横浜北川崎及び湘南ブロックで仮目録作成
 - 5.9 第3回総会（県立博物館）
- 1982.4.24 第4回総会（県立博物館）
 - 10.2 神奈川県民アカデミー「神奈川県の植物を学び調べる講座」開催（全12回）
 - 10.10 田村道夫先生の指導で箱根でトリカブトの観察会
- 1983.3.26 第5回総会（県立博物館）
 - 3. 全ブロックの仮目録を刊行
 - 4.24 第1回重点地域調査が中井町で開催
 - 5. 「座間の植物」が同市より刊行
- 1984.4.8 第6回総会（平塚市博物館）
 - 10. 役員会で内容と執筆分担決定
- 1985.3.20 「湘南植物誌1」平塚市博より発行
 - 4.6-8 県内342地点で第1回開花季節調査
 - 4.20 第7回総会（県立博物館）
 - 12.14 安藤為次記念財団より安藤為次記念賞奨励賞を受賞
- 1986.3. 分布図集—シダ・単子葉編—発行
 - 4.5-7 204地点で第2回開花季節調査
 - 5.31 第8回総会（横浜こども植物園）
- 1987.4.25 第9回総会（県立博物館）
- 1988.3.15 「神奈川県植物誌1988」刊行（A4判1442ページ）
 - 3.27 第10回総会兼出版記念会（県博）
 - 3.19-5.8 刊行記念特別展「神奈川の植物」開催（県博）

(3) 機関誌「FLORA KANAGAWA」の発行

各地区の調査経過の情報交換、新知見の速報、同定の手引になる記事などを掲載する目的で、1979年4月に調査会の機関誌「FLORA KANAGAWA」第1号が発行された。当初は季刊程度に発行される予定だったが、調査の実務に追われた後半は発行間隔が延び、9年間に24号、通算192ページまでが発行された。第16号からは各ブロックで交代して編集にあたることになった。発行の記録と、主な記事は下記の通りである。なお、掲載された全記事は、神奈川県植物誌の文献目録に収録されている。

- 1号 1979.4.10 ミドリハコベとコハコベ、編纂事業計画
- 2号 1979.6.16 エゾエノキ、横浜市内帰化植物目録
- 3号 1980.3.15 ミミナグサとオランダミミナグサ、各ブロックの状況
- 4号 1980.7.20 ハコネウツギ類、県央合同調査の記録
- 5号 1980.11.10 サガミジョウロウホトトギス、県北合同調査の記録
- 6号 1981.4.30 マヤランとキヨスミウツボ、湘南合同調査の記録
- 7号 1981.6.20 サツキ、調査会員名簿
- 8号 1981.8.1 クリとクヌギ、大和の植物寸見、各地区の記録
- 9号 1981.10.25 メヒシバ類、タカサゴユリ、標本の作り方
- 10号 1981.12.5 ムラサキセンブリ、イチゴツナギ属の見分け方
- 11号 1982.2.20 大谷茂先生の足跡、マイコンによる分布図の作成
- 12号 1982.6.5 サガミニガナ、相武植物分布資料1
- 13号 1982.12.10 ヤマトリカブトとハコネトリカブト、箱根の合同調査
- 14号 1983.8.1 アズマツメクサ、神奈川県バラ、アメリカトゲミギク
- 15号 1983.12.20 ソナレマツムシソウ、湘南ブロックのニューフェース
- 16号 1984.7.15 湘南のシダ、湘南地区調査員の声（湘南編集）
- 17号 1984.10.15 アズマイチゲ、県央各地区の調査状況（県央編集）

- 18号 1985.1.1 ヨコハマダケ, 横浜・川崎
追加植物 (横浜編集)
- 19号 1985.5.10 タシロラン, 三浦地区の概
況, 三浦のシダ (三浦編集)
- 20号 1985.9.20 西湘地区の調査より, 開花
調査報告 (湘南編集)
- 21号 1985.12.15 トダイアカバナ, オカタ
イトゴメ (県央編集)
- 22号 1986.10.6 ミナトクマツヅラ等の新記
録帰化種, ハハコグサ属
- 23号 1987.1.15 開花調査, 湯河原の調査,
アイノコクマワラビ (湘南編集)
- 24号 1987.4.10 ニブイロアゼガヤ, キンミ
ズヒキ属, 植物誌刊行決定

(4) 仮目録, 分布図の発行

県内各地の植物を精密に調査するためには, 各ブロック毎に既採集種と未採集種が, 調査の各段階で明確に把握されていなければならない。このことの重要性は, もっとも精力的に調査を進めた鶴見高校の森, 勝山両先生の担当地域で強く認識され, 1981年3月に横浜北・川崎地区のチェックリストが作成された。これとは独立に湘南ブロックでも同時期に仮目録の第1集が平塚市博物館から発行された。このように, 調査前半では, 各ブロックで手作りのチェックリストが活用された。

これと並行して, 初山泰一, 長谷川義人両先生の手で, 神奈川県に産する可能性のあるすべての植物のリストアップが進められた。これは今回の調査の基礎目録というべきもので, 1983年3月に, その時までの各メッシュのデータと合わせて「神奈川県植物誌仮目録」が発行された。これによって, 調査の進行状況と今後の課題の全貌が把握されることになり, 調査会員の多くが具体的に植物誌の映像を脳裏に結ぶことができるようになったと思われる。植物誌出版を目指す長い道中の記念すべき一里塚であった。

この目録が出された時点で, データのマイコンへの入力がい, リストを直接出力できるようになり, 1984年, 85年とブロック別のチェックリストが発行された。

また, 各種類の分布状況を知ることも, 各地域での探索のヒントとして有力な情報源となる。そうした目的で分布図集も刊行された。植物誌調査に関連したこれらの資料を下記にリストアップし

た。

なお, 標本に基づく分布データをマイコンで処理することは, 本調査の特色と言えることである。作業のプログラムは大場達之先生が作成されたもので, 調査の開始時以来, ハードもプログラムも改良を重ねられた。入力作業にあたったのは, 1982年から85年にかけては主に森本七子さんで, それ以降, 蒔田かおるさん, 北川淑子さんが引き継いだ。最終段階の植物誌原稿の入力には小穴潔子さんの力が大きかった。

- 1981.3 横浜市北部金沢区川崎市採集標本目録
3 湘南ブロック仮目録1 (平塚市博物館)
9 座間市植物仮目録 (座間市植物調査団)
- 1982.3 湘南ブロック仮目録2 (平塚市博物館)
3 横浜川崎ブロック仮目録2
4 座間市植物仮目録2 (座間市植物調査団)
- 11 1981年に記録し得たる神武寺(三角地帯)の植物 (初山泰一著)
- 1983.3 神奈川県植物誌仮目録1
6 湘南ブロック仮目録3 (平塚市博物館)
7 山北・松田仮目録
- 1984.3 神奈川県植物誌 仮目録 (横浜川崎・三浦・湘南・県央・県北・西湘 各ブロック)
- 1985.3 神奈川県植物誌 仮目録 (横浜川崎・三浦・湘南・県央・県北・西湘 各ブロック)
- 1986.3 「神奈川県植物誌分布図集—シダ類・裸子類・単子葉類」
8 「県央ブロック仮目録」
- 1987.4 「神奈川県植物誌分布図集—離弁花類」
4 「神奈川県植物誌分布図集—合弁花類」

(5) 調査能力を高めるためのゼミナール (県立博物館主催の県民アカデミーを含む)

- 1979.6.3 スゲ属の見分け方 大場達之先生
9.30 ヤナギ科の話 長谷川義人先生
バラ科の話 初山泰一先生
12.9 神奈川のシダ 守矢淳一先生
- 1980.2.17 神奈川のスマイレ 高橋秀男先生
神奈川のタンポポ 大場達之先生
4.19 さく葉の仕方 高橋秀男先生
6.8 丹沢の植物 城川四郎先生
テンナンショウ類 大場達之先生
12.13 マメ科の研究 許建昌先生 (玉川大学)
- 1981.2.28 類似植物の区別 森茂弥先生

- 7.4 水生植物の分類 大滝末男先生
(聖徳学園短大)
- 10.2 神奈川のフロラ特性 高橋秀男先生
神奈川の植生の概観 大場達之先生
- 10.9 神奈川のトリカブト 田村道夫先生
(大阪大学)
- 10.10 トリカブト属の野外講座(箱根)
田村道夫先生
- 10.16 神奈川のササとタケ 鈴木貞夫先生
(前玉川大学)
- 10.30 イネ科の分類 森茂弥先生
- 11.13 神奈川のキイチゴ属 鳴橋直弘先生
(富山大学)
- 11.20 神奈川のイノデ類 芹沢俊介先生
(愛知教育大学)
- 11.27 神奈川のヤブマオ属 矢原徹一先生
(東大植物園)
- 12.5 スゲ属 大場達之先生
カヅリグサ属 勝山輝男先生
- 12.18 神奈川のネコノメソウ属 若林三千男
先生(都立大学)

(6) 調査推進のための合同調査

1. ブロック主催合同調査(全体に呼びかけたもの)
- 1980.4.13 (横浜南地区) 水取沢市民の森～円海
山～峰市民の森
- 5.11 (県央地区) 宮ヶ瀬溪谷～唐沢キャン
プ場～物見峠
- 8.17 (県北地区) 青野原～焼山～青根平丸
- 10.19 (湘南地区) 大秦野～震生湖
- 11.9 (三浦地区) 小浜～毘沙門
- 1981.4.29 (横浜北川崎地区) 川崎市麻生区黒川
- 5.6 (横浜南地区) 三保市民の森付近
- 5.31 (三浦地区) 逗子市二子山
- 7.12 (県北地区) つつじ新道檜洞丸～石棚
- 10.11 (湘南地区) 菩提～菩提峠
- 11.22 (県央地区) 愛川町八菅山～海底～塩
川橋
- 11.28 (横浜南地区) 戸塚区上郷瀬上谷戸
- 1982.3.28 (横浜南地区) 水取沢市民の森
2. 重点地区調査(調査の遅れている地域を重点的
に合同で調査)
- 1983.4.24 中井町・大井町
- 4.29 戸塚区(松陽高校)
- 5.15 箱根～小田原市坊所

- 6.4 箱根駒ヶ岳～須雲川
- 6.25 畑宿～飛竜の滝～三国山～仙石原
- 7.9 金時神社・丸岳・長尾峠・小塚山
- 8.30 芦ノ湖周辺
- 9.4 開成町～最乗寺
- 9.15 南足柄地藏堂～夕日の滝
- 9.25 清川村塩水林道～本谷
- 10.9 津久井町早戸川
- 11.23 早川・入生田・塔の沢
- 1984.4.6 別所温泉～桃の木林道
- 5.20 開成町・小田原市府川～和留沢
- 6.9 箱根乙女峠～金時山
- 6.17 中津川石小屋上流～相模湖町新戸～
藤野町篠原
- 6.24 足柄峠～明星林道
- 6.30 谷太郎林道～不動尻～大山
- 9.15 足柄峠～矢倉岳～洒水の滝
- 9.22 和田峠～陣馬山
- 9.30 長者舎～犬越路
- 10.10 半原峠～経が岳
- 10.13 城山町中平～小倉山
- 10.28 西丹沢, 中川川西沢
- 11.11 小田原市根府川～白銀林道
- 1985.5.11 三嶽山～南足柄
- 5.26 三国山～明神峠
- 6.8 西丹沢, 浅瀬
- 7.13 箱根二子山
- 9.8 塩水林道
- 9.15-16 熊木沢, 大石山
- 10.10 相模湖, 津久井方面
- 12.22 湯河原方面
- 1986.6.1 世附, 皆瀬川, 寄
- 9.7 箱根仙石原
- 9.21 湯河原幕山
- 10.5 津久井町城山～相模湖町嵐山

(7) 標本鑑定会

- 1984.1.21 シダ植物 中池敏之先生(国立科学博
物館)
- 1.28 ヤブマオ属 矢原徹一先生(東大植物
園)

(8) 標本の整理

採集された膨大な資料標本の分類整理は有志会
員の長期にわたる献身的な努力によって進められ
たものである。平塚市博物館, 横須賀市自然博物

館担当メッシュのものはそれぞれの館に収納され、それぞれの地域の熱心な会員によって整理された。例えば、平塚では斎藤、三輪、斎木、山口、米山、内藤さん達であり、横須賀では山内、浜中さんの御両名である。それ以外の地域の標本については、当初県立博物館に収納棚が整備されていなかったために、森、勝山両先生の県立鶴見高校に運び、両先生が分類整理を精力的に進めて下さったものである。1980年から82年にかけてそうした体制が続いた。

やがて県立博物館地下室に標本棚が逐次整備されるにつれ、この地下室が資料標本のセンターとなった。1983年にはここで分類作業を兼ねた勉強会が木曜日に行われ、木曜会と称していた頃もあった。主なメンバーは吉川、内藤、平松、蒔田、森の皆さんである。1985年までこの状況が続き、守矢淳一先生が週1回は県立博物館に出勤されて、ここで標本の整理を担当された。1986年からは城川も県立博物館の囑託として週4日、この資料標本センターである地下室で専ら標本の検討と整理にあたった。1986年から1987年にかけては、病気休職中の森茂弥先生もこのセンターに顔を連ねてイネ科の標本の検討に没頭した。

続々と搬入される標本の同定、記録、コンピューター入力、標本整理の作業で、地下室のセンターは毎日多忙を極めた。終始、標本整理に尽力された会員は吉川、内藤の御両人である。1987年10月以降には、城川も守矢、森先生も自分の分担の原稿作成のための検討に追われることが多くなって、搬入された標本への対応について不行き届きな点が多くなった。確かに博物館に納入したにも関わらず、できあがった分布図には点が打たれていないという標本提供者の不満の声はこの時期のものが多くなのであろう。整理作業よりも執筆担当者の皆さんが標本を検討し、標本から描画作成するという標本活用に忙殺されたということである。この時期にはコンピューター入力を主任務とされていた、蒔田、北川さんも標本の同定整理に奮闘されたし、会員の浜中さんも標本のチェックに連日ご協力を頂いた。整理未完のままであった標本については、植物誌刊行後も吉川、内藤御両人の手で整理が進められている現状である。

山岳地帯の調査について

森茂弥・勝山輝男

始めの総会で決めたように、各自が最も採集しやすいメッシュについて各自が責任を持って積極的に行えば、採集はほぼ2～3年で終わったはずですが、そう簡単にことは運びませんでした。

森は鶴見区、勝山は緑区1、2について一応の調査を終えた後、近所の手薄そうな所として川崎市、横浜市北部に採集範囲を広げ、乾燥標本を分類記号に従って仕分けをし、チェックリストの作成を始めました。これがないと、どの植物をとるべきかはっきりしないためです。この中間集計には保土ヶ谷区、金沢区のものも都合により加えました。

82年春、横浜、川崎は交通の便もよく、平地でもあり、私たち二人がやらなくても誰かがやってくれるかもしれない、しかし今の進捗状態では主として県境の山岳地帯が殆ど手つかずで植物誌を作るためには致命的な欠陥になる可能性がある、普通の人の行きにくいメッシュの採集をやらうと相談し、山北、箱根、南足柄、藤野などにも行くことにしました。

森の家は東京の新宿に近いので、国鉄中央線、中央高速バスを使えば相模湖、藤野へ、小田急線で松田、小田原へ、小田急高速バスでは箱根へ比較的楽に行くことができます。山北については内藤さんが不老山付近(山北7)へ数回採集されただけでした。山北1は地図で見ればお分りのように、このメッシュ唯一の自動車道路が横切る三国峠は、横浜から御殿場経由で約100km離れています。上野、浅瀬入口からの徒歩での往復もかなり難しいと思われます。森の場合は、新宿から中央高速バスで山中湖か平野に、さらに時間節約のためタクシーで三国峠へと急げば、1.鉄砲木の頭、高指山をかすって平野へ、2.切通し峠から世附川沿いに浅瀬入口へ、3.不老山を経て山市場へ、などのコースが取れ、わが家から約12～16時間と5000円を費やして、日帰りが可能でした。翌日から次の土曜までの間に、普通の勤務をし、乾燥、同定、整理を大急ぎで済ませるのは本当に大変なことでした。

勝山は主に丹沢の高い所を引き受けました。家が緑区にあるため、丹沢に行くには早朝から行動を開始しなければなりません。大室山、畦ヶ丸、檜洞丸へは新松田発8時11分のバスに乗れば日

帰りが可能でかなり十分な調査ができました。ただ歩くだけなら一般に楽に日帰りができるコースですが、採集し、それを新聞紙に挟みながら歩くとなると、帰りはたいてい西丹沢発18時10分の最終バスになってしまいます。ゆっくり採集したい時には、土曜日の午後に学校を出て、畦ヶ丸、加入道山、犬越路の避難小屋に泊まります。無人の山小屋なので、寝袋、食料、水なども持たねばならず、荷物が大きくなってしまいます。玄倉川流域から丹沢の主稜線に登るには、どうしても1泊2日です。ユースンロッジは素泊まり1000円で、何回か利用しました。ユースンからは同角の頭や檜洞を経て、檜洞丸、熊木沢から蛭ヶ岳等へ行けます。交通費は長津田から新松田を経て西丹沢や玄倉へは往復で2300円程度です。

蛭ヶ岳～檜洞丸、蛭ヶ岳～丹沢山～塔ヶ岳の稜線は勝山が鶴見高校の山岳部を引率しながら採集ができました。津久井の焼山から入り、黍殻山で幕営して蛭ヶ岳に登り、塔ヶ岳や檜洞丸へと縦走します。採集している間に生徒はどんどん先に行ってしまう、後から追いつくのが大変です。

最も行きにくいのが孤釣山です。日帰りは不可能で、山中湖から入り、山伏峠の山中湖高原ホテルに泊まるか、山頂直下の避難小屋に泊まって畦ヶ丸にぬけます。大棚の頭から孤釣山を経て畦ヶ丸に至る稜線が今回の調査で最も不完全な場所でしょう。それでも尾根筋に道のある所はかなり採集しましたが、沢筋は一部を除いてはほとんど歩いてはいません。今後も機会があれば補充調査をしたいものです。

1982～83年の2年間で他のブロック並みの標本が揃ってきたので、82年7月に第1回、83年3月に第2回の仮目録を作り、84年の全体目録につなげました。我々は84年からは丹沢だけでなく、箱根明神ヶ岳や仙石原などへ行きましたが、箱根方面の調査不十分は否めません。

このようにして、森が82年26回、83年15回、計41回42日、勝山が82年22回、83年16回、84年16回、85年10回、86年9回、計73回93日を採集にあてました。調査回数をメッシュ別にまとめると次のようになります。カッコ内が調査回数。

藤野1(8)、藤野2(6)、相模湖(10)、津久井1(6)、津久井2(6)、津久井3(7)、津久井4(2)、津久井5(5)、城山(4)、山北1(9)、山北2(12)、山北

3(19)、山北4(7)、山北5(19)、山北6(21)、山北7(5)、山北8(7)、南足柄1(3)、南足柄2(6)、南足柄3(2)、開成(1)、松田(13)、箱根1(7)、箱根2(2)、箱根3(2)、箱根4(9)、箱根5(3)、箱根6(2)、小田原1(1)、小田原2(1)、小田原3(1)、清川1(1)

この他に、合同調査といって、手薄と思われるメッシュに10人ほどの人が自動車で出かけ、効率よく採集する方法も、本文38ページの記載通りかなりの回数行われました。また、自動車が入りにくい津久井1～5のメッシュは城川さんが忙しい校長職の合間に、自宅からかなり離れているのにも関わらず採集されました。

採集が調査という仕事のすべてではありません。乾燥、同定、分類番号つけ、格納、防虫剤入れ、チェックリスト作成も不可欠の仕事です。鶴見高校で一応整理された標本は、横浜、川崎、山岳地帯など県下108メッシュの内、約半数に及びました。しかし、残念なことに森は83年9月18日芦ノ湖西岸の採集を最後に、慢性すい炎と手術後の貧血などのために4年間第1線から退き、退院後の体調のよい時には、多くの方々が集められた標本のさらに詳しい同定という病人にふさわしい仕事にあたりました。この間、勝山は前述の数字が示すように、採集を続け、同定と分布図作成に努力しました。

「神奈川県植物誌1988」の完成に際して、私たちは犯した誤りを恐れると同時に、皆さんのおかげで本当によい勉強をさせてもらったと思っています。

≡・各地の先生方より3 ≡

・桑島正二先生(近畿植物同好会会長)

この度は「神奈川県植物誌1988」をご恵贈いただき、ありがたく拝受いたしました。十年の年月と同志同好者多数の力を結集して、県内隈なく精査された上での大著、既刊の植物誌に類をみないもので感服の他ございません。今後の私の勉強に役立たせて頂きます。私は昨年来、大阪府植物誌の植物目録編の改訂作業中ですが、それにも大きな刺激となりそうです。先ずは御礼まで。

湘南ブロックの活動と 「湘南植物誌」

浜口哲一

(1) 体制を整える

筆者が、平塚市博物館として調査会の活動に参加したのは、会が発足した直後のことであった。植物に興味があったのはもちろんのことだが、調査の内容を知って、地域博物館としてぜひ協力したいと考えたからであった。湘南ブロックの代表の守矢淳一先生とご相談し、1979年4月の秦野の調査についての打ち合わせを皮切りに、湘南のセンターとして動き出した。

湘南は、この調査が始まる前から、フローラの研究が進んでいる地域であった。守矢淳一先生は平塚・大磯・伊勢原の目録をまとめられており、藤沢では根本平先生が同様の仕事をされていた。茅ヶ崎では高橋秀男先生などの指導された講座をきっかけに茅ヶ崎植物会が発足しており、市内の植物調査に取り組んでいた。これらの蓄積は、調査を進める上で大きな指針になったことはいうまでもない。

1979年の5月に湘南としての全体会を行い、調査地域の分担を決めて、具体的な調査がスタートした。受け持った市町村は、藤沢・茅ヶ崎・寒川・平塚・伊勢原・秦野・大磯・二宮の合計21メッシュであった。最初の1年半ほどは、収集した標本は平塚市博に届けるようにお願いするくらいで、組織だった活動は行っていなかった。しかし、地域を分担した30名ほどの中に、実際にはほとんど調査が進まないメンバーがいるようなので、2回ほどアンケートを取り、調査への参加の意向を再確認した。その結果、約半数の人はいろいろな事情で標本の採集は難しいことが分かり、1981年3月に地域の分担を再編成した。この時のメンバーがその後の調査を最後まで支えることになった。

(2) 進む調査と整理

1980年秋からは、定期的に平塚市博に集まって標本の整理を兼ねた勉強会を行う事になった。当初は毎月第3土曜日を活動日としていたが、標本が集積してくるにつれて、それでは間に合わなくなり、1982年10月からは、第2・4木曜日と第3土曜日に集まることにした。初期の勉強会の常連メンバーは、守矢淳一先生を初

め、茅ヶ崎の斎藤滋子、三輪徳子、斎木操、藤沢の大沼信子、平塚の大貫清太郎、金子順三、山口育子、秦野の住吉静子の諸氏で、根本平、早川亮太、佐々木あや子等の各氏からも定期的に標本が届けられ、調査は順調に進んでいった。1983年からは、中井町、大井町と小田原3のメッシュも湘南で受け持つことにし、第4木曜日には野外の合同調査をたびたび実施した。調査が終盤にさしかかった1986年からは湯河原、小田原など西湘のメッシュもお手伝いを心がけた。

標本の整理は、初期にはメッシュ別にダンボール箱に入れていたが、やがて分類別に整理するようにし、収蔵室がある程度整った1983年からは種別のカバーに標本をはさみ、標本戸棚に配架した。ちなみに、平塚では種別のカバーはクラフト紙を3つ折にしたものを使っているが、これは新聞紙包のままの標本でも標本が落ちる危険が少なく、一般に使われる2つ折のものより、好都合であった。

調査がある程度進んでくると、各メッシュの進行状況が分かるようなチェックリストの必要性が感じられた。そこで、1981年3月に最初のリストを博物館で印刷した。その後、82年、83年とチェックリストを作り直し、84年には県立博で印刷が行われたが、これらのリストは調査を進める上でなくてはならないものであった。

(3) 調査にどのくらいの時間がかかるか

今回の植物誌を見る上で読者が気になるのは、各メッシュの調査にどのくらいの時間がかかっているかということであろう。メッシュ毎の調査努力のばらつきも問題になるところである。こうした点についての記録は調査員各自の野帳に眠ったままになっているが、一つの例として小田原3の調査について紹介してみたい。

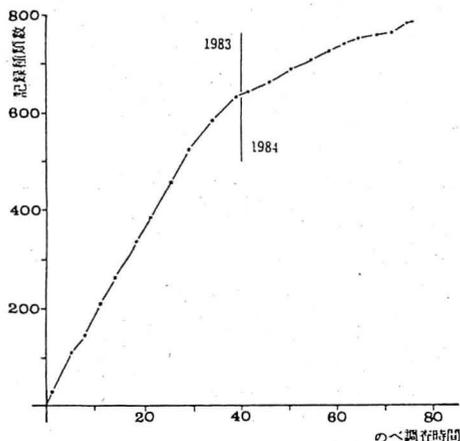
このメッシュは1983年から筆者が担当することになったが、それまでの記録は皆無で、その年の5月7日に国府津駅付近の探索を行ったのを皮切りに、まったく白紙の状態から調査にとりかかった。フローラ調査にはどのくらいの時間がかかるのかに興味があったので、調査に行った日は、休憩や食事の時間を除き、野外を歩いた実働時間をこまめにメモすることを心がけた。調査は主に1983年と84年の2年間に集中して行ったが、その間に合計22回足を運び、延べ80時間歩き回った。合同調査などでは、花や実がなく

てもとにかく標本にする方法がとられたが、このメッシュでは、標本としても状態のよい資料を蓄積する積もりで採集を行った。

こうした調査の結果合計775種類を記録することができた。調査の積算時間に対する、積算種類数の関係をグラフにすると、下図のようになる。この図で明らかのように、2年目に入ると、当然のことながら、時間当りの新記録種数は著しく減少している。初年度には、1時間あたり約15種類の新しい収穫があったのに、次年度は約5種類となった。このメッシュでは、田中一雄氏からシダ植物を多数補充して頂いたりして、最終的には825種類が記録されたが、その9割に到達するには約60時間を要した。これは、「30平方キロ程度の調査地域のフローラは、季節と環境をまんべんなく網羅しながら60時間程度調査を行えば、ほぼ概要を把握できる」ことを示しているだろう。この数字は調査の計画を立案する時の一つの目安になるのではないだろうか。

また、湘南ブロック全体の調査の進行状況をグラフ化してみると、下図のようになる。これは、仮目録を作成する度の合計記録数で、最初の5年間でほぼ頭打ちの傾向を示している。この数字も調査に必要な年限の目安として意味があるだろう。

しかし、頭打ちになったといっても最後の年度でも増加が見られている。これは調査員が最後まで粘った証でもあり、9年間という年月は決して長すぎることはなかったとも言うことができるだろう。



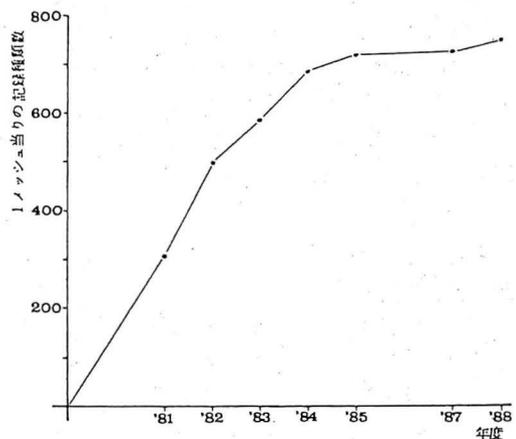
調査時間と記録種類数 (小田原3の調査)

(4) 湘南植物誌の編纂

調査がある程度進んで来た段階で、県全体の植物誌の他に湘南地域としての植物誌を作りたいという気持ちが生まれてきた。県と同じ物を作るのでは意味がないが、日本シダの会が編纂している「シダ植物図鑑」のように、全標本のデータが収録されていて博物館の収蔵資料目録を兼ねるようなもの、また、各メッシュを担当した調査員の経験に基づいて、各種類の産量を表現した分布図を掲載したものというのが、私の描いた構想であった。幸い博物館の予算で、そうした目録を発行するめどができたので、1983年末から具体的な作業を開始した。1点1点の標本のデータを収録するためには、全部の標本に標本番号を打たねばならない。そのために、次のような手順で作業を進めた。

1. ナンバリングで、ラベルと、標本を包んでいる新聞紙に同一ナンバーを打つ。
2. ラベルをいったん標本から抜き出し、そのコピーをとる。(植物誌調査で使用しているラベルは0.8倍に縮小コピーするとB7版になる。)
3. ラベルはもとの標本に戻す。
4. ラベルのコピーはB7カードとして、種別にカードケースに配列する。
5. カードをもとに目録の原稿を作成する。

全体では最終的に標本の点数が約2万点になったので、これらの作業には、膨大な時間を必要とした。ナンバリングは総て筆者が行ったが、その他の仕事は月2~3回のブロックの活動日に、主に斎藤、三輪、斎木、山口、後には米山智恵子、



湘南ブロックの調査進行状況 (当初から担当した21メッシュ)

内藤美知子氏も加わった女性陣の献身的な活躍で進められた。その努力の結果、全標本にナンバーが打たれたことは、今回の調査で湘南だけが達成した、誇って良い成果だと思う。

ナンバリングの前提としては、確実な同定が必要なことは言うまでもないが、筆者は、まず全標本を見て、同定に疑問のあるものをチェックし、不明なものは度々県立博に持込み、高橋、大場、城川先生らに指導を受けた。鎌倉の初山先生のお宅にまで押し掛けたことも再三にのぼった。さらにナンバリングをしながらもう一度全部に目を通した。イネ科などは、最終的にもう一度チェックをした。このように湘南で採集された標本の全部を再度にわたり検討したことは、筆者個人としてはかけがえのない勉強になった。また、その時に学んだのは、生意気な言い方になるかもしれないが、一度誰かの同定を受けた標本でも、少しでも疑問点があれば、徹底的に検討する必要があるということである。

また、各メッシュ担当者にそれぞれの種類の産量を「多い・普通・少ない・稀・過去の記録のみ」の5段階に分けて、記入してもらい、それをもとにして分布図を作成した。その評価基準は必ずしも客観的なものではないが、同一地域を頻繁に調査で歩いている人の印象は、かなり信頼できるのではないかと考えて、こうした試みを行ってみた。メッシュ担当者が明確で、四季を通じて踏査していた湘南ブロックならではの可能なことであった。

こうした準備に基づいて、1985年3月に「湘南植物誌1—合弁花類」を刊行した。翌年からは、マイコンで版下を作成して費用の節約を図り、86年3月に離弁花類、87年3月に単子葉類・シダ類を刊行して、湘南植物誌は完結した。

そして、87年春からは、植物誌編集と歩調を合わせて、最終的な標本の整理を行っていった。

(5) 湘南ブロック活動日誌

以下にまとめたのは、湘南ブロックとしての活動で、合同調査は3名以上が参加したもののみを上げた。これ以外にも、各自の担当地域には足しげく通ったのは、もちろんで、1~2名で他のメッシュの補充調査に歩いたことも多かった。

1979.4.8 秦野地区打ち合せ(8名)

5.12 湘南ブロック打ち合せ(19名),

地区の担当などを決定

6.9 平塚市浅間山で野外勉強会

10.20 打ち合せ(8名), 毎月第3土曜に平塚市博で標本整理を兼ねた勉強会を行うことになる

1980.1.6 平塚市吉沢でシダ野外勉強会

3. 調査員に進行状況のアンケート

3.15 ブロック総会(10名)

10.19 秦野5を調査会全体で合同調査、デンジソウ、ミシマサイコ等を記録

1981.3 調査員アンケート。発足時、参加の意思表示のあった会員の中で、回答のない人、調査は無理という人が約半数出て、約15名のスタッフが固まる

3.20 仮目録第1号を発行、1200種を収録

3.29 ブロック総会(13名)、この年度も毎月第3土曜日に勉強会を行行、二宮の調査を合同で進めることが確認

10.11 秦野2を調査会全体で合同調査、合計463種を記録

1982.3. 仮目録2号を発行、この年度も、毎月第3土曜日に勉強会を行行、湘南植物誌準備作業を開始

10. 第2、4木曜も整理日とし、以降毎月3回の会合を持つ

1983.3. 仮目録3号発行。この年度は、第3土曜日、第2、4木曜日を会合の日とし、中井、大井、小田原3も担当することになったので、合同調査が多くなった。

5.19 合同調査(中井/井の口、5名)

6.23 合同調査(藤沢1/遠藤、5名)

8.9 合同調査(中井/岩倉、4名)

9.10 合同調査(中井/井の口、5名)

9.20 この日現在 合計14769点、メッシュ平均615種、イヌワラビ等20種がオールクリヤ

10.15 合同調査(江ノ島、4名)

10.27 合同調査(中井・大井、6名)

12.20 標本ナンバリング、ラベルのコピー作業開始、この時、計16215点、平均676種、48種オールクリヤ

1984.3.17 ブロック話し合い、月3回会合で、第2木曜は野外調査、この年度に湘南植物誌1の発行を決定

3. 第4次チェックリスト(県博)

- 4.26 合同調査(中井・大井/鴨沢, 4名)
- 5.24 合同調査(秦野3/ヤビツ峠, 4名)
- 6.1 合同調査(中井/比奈窪, 3名)
- 6.28 合同調査(大井/酒匂川, 4名)
- 9.29 湘南植物誌の構想をまとめる
- 10.4 合同調査(秦野2/菩提, 4名)
- 10.11 メッシュ担当者に分布メモ記入依頼
- 10.25 合同調査(中井/藤沢, 3名)
- 11.29 合同調査(中井, 5名)
- 1985.3. 「湘南植物誌1」刊行, この年度も
月3回活動し, 西湘の調査も応援することになる
- 4.25 合同調査(小田原2/城山, 4名)
- 5.23 合同調査(湯河原1/天照山, 4名)
- 6.15 合同調査(湯河原1・小田原4,
6名)
- 7.25 合同調査(中井・大井, 5名)
- 9.12 合同調査(湯河原2/白銀林道, 5
名)
- 9.17 合同調査(湯河原1/城山, 3名)
- 10.3 合同調査(小田原2・大井, 5名)
- 11.7 合同調査(小田原1・箱根5, 5名)
- 1986.2 大磯町の田中一雄氏より多数の貴重な
シダ標本が提供
- 2.27 合同調査(湯河原1, 4名)
- 3.20 「湘南植物誌2」刊行
- 4.24 合同調査(小田原1/風祭, 5名)
- 5.29 合同調査(湯河原2, 鍛冶屋, 6名)
- 6.26 合同調査(湯河原1, 5名)
- 9.25 合同調査(小田原2/府川, 7名)
- 10.23 合同調査(小田原1/久野, 7名)
- 1987.3.20 「湘南植物誌3」刊行。この年度は
第2木曜に整理, 第4木曜に野外調査
- 4.23 合同調査(秦野3/ヤビツ峠, 8名)
- 5.28 合同調査(秦野5・中井, 4名)
- 6.25 合同調査(厚木4・清川3, 6名)
- 7.23 合同調査(小田原1/和留沢, 5名)
- 9.10 合同調査(厚木2, 4名)
- 10.1 合同調査(松田/寄, 7名)



ハマカキラン

神奈川県植物誌版下作成記

勝山輝男

9年間の調査結果を神奈川県植物誌1988として刊行するにあたり, 印刷費の捻出が問題であった。少ない費用で印刷するためには完全版下を自分達で作らなければならない。原稿はパソコンのワープロに入力されているが, たとえ最先端のページプリンターを使用してもドットのパターンで作られる字の質には限度がある。パソコンに接続できる活字プリンターを使用することで十分な質の文字が打出せる事がわかった。日本タイプライター製のDLQプリンターROBOを購入し, これで本文を打出しそれに分布図を貼りつけて版下を作成することになった。

パソコンを2台使い, 1台で文書ファイルを加工し, もう1台を活字プリンターにつないで印刷する。活字プリンターは字の質は良いが, 1行ずつ活字を組替えて印字するので, 1ページ打出するのに20分位かかる。専用のソフト(DELQWARD)はパソコンのワープロに比べて使い勝手が悪いので, ワープロの中で最後の校正をしながらレイアウトにあわせて改ページし, それを印字速度の速い普通のプリンターで打出し, ページ割や内容のチェックをする。その後DELQWARDに転送し, 活字の種類, 1行の文字数や1ページの行数, ページ番号などを指定し, アルファベットや数字が単語の途中で改行されないように調節してからプリンターに送り, 活字で打出す。活字プリンターに信号を送ってしまえば, 後はすべて機械が行なう。ときには無人の作業室で夜とおし活字を打続けることもあった。別室では最新の分布図が別のパソコンで打出されている。同時に3台のパソコンが活躍したことになる。システムのすべてを把握しているのは大場一人だけ, オペレーターも勝山を加えて二人だけ。もし途中で大場が倒れるようなことがあったら, 版下作成は中断し, 植物誌の3月刊行は不可能であったろう。

活字が打出されると, 貼り手の仕事が始まる。蛍光灯の上すりガラスをつけた貼りつけ台の上に版下を置き, 四隅にあるトンボを基準にして, はみ出さないように分布図と植物図を貼り込む。神経を使う仕事である。偶数ページに文章, 奇数ページに対応した図がはいるようにした。いざ貼り込み始めると図が無く, 空白が大きすぎる場所もある。この段階で図を書き足したものも多い。

また標本を直接コピーして貼り込むのも良い方法であった。図の貼り込みが終って読み直して見ると、誤字や内容の誤りが見つかることもある。その部分だけ活字で打出し、両面テープで貼りつけて修正する。またこの活字プリンターは1000ページ以上の本を作ることを考えていない。1000ページ以降はすべて別に打出した数字を貼り込んだ。ときにはページ割がうまくいかず、空白ページができてしまうこともある。そこには神奈川県をタイプローカリーとする植物の写真を入れることにした。貼り手は執筆者と博物館の山口があたり、会員のボランティアも加わった。印刷所に版下を渡す締切はシダから単子葉まで

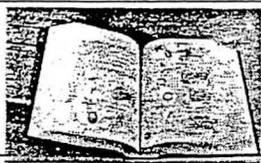
が12月、キク科までの本文が1月、残りが2月であった。11月末に始まり、正月3ヶ日に休んだだけで1月いっぱい、作業は連日夜11時頃まで行なわれた。他に職を持つ者は土日と平日の勤めが終わった後、学校が冬休みの間は県立高校の教諭がフルタイムで作業に参加した。

2000部が5月までに売切れてしまった。これだけの内容の本が1万円前後という破格の値段、多くの読者は「安い」と思われたことだろう。無償の労働奉仕があったからこそこの値段で刊行できたのである。9年間の野外調査と研究成果をまとめた1400ページ重さ4kgの神奈川県植物誌が1万円、これはどう考えても安い。

●植物誌の反響

「植物誌」の発行は、神奈川県立博物館の職員とボランティアの協力によるもので、その内容は、神奈川県内の植物の分布と特徴を詳しく紹介している。この植物誌は、植物愛好家や研究者にとって非常に貴重な資料となる。また、植物の分布図や写真も豊富に掲載されている。この植物誌の発行は、植物の保護と研究に大きく貢献している。また、植物の分布図や写真も豊富に掲載されている。この植物誌の発行は、植物の保護と研究に大きく貢献している。

「植物誌」の発行は、神奈川県立博物館の職員とボランティアの協力によるもので、その内容は、神奈川県内の植物の分布と特徴を詳しく紹介している。この植物誌は、植物愛好家や研究者にとって非常に貴重な資料となる。また、植物の分布図や写真も豊富に掲載されている。この植物誌の発行は、植物の保護と研究に大きく貢献している。また、植物の分布図や写真も豊富に掲載されている。この植物誌の発行は、植物の保護と研究に大きく貢献している。



「植物誌」の発行は、神奈川県立博物館の職員とボランティアの協力によるもので、その内容は、神奈川県内の植物の分布と特徴を詳しく紹介している。この植物誌は、植物愛好家や研究者にとって非常に貴重な資料となる。また、植物の分布図や写真も豊富に掲載されている。この植物誌の発行は、植物の保護と研究に大きく貢献している。また、植物の分布図や写真も豊富に掲載されている。この植物誌の発行は、植物の保護と研究に大きく貢献している。

サクラソウ、ヨシカワギク... 30新種も

県内の植物何でもわかる

「戸籍本」9年がかりで完成



県立博物館
が
刊
行

愛好家ら100人 手弁当で現地調査

「植物誌」の発行は、神奈川県立博物館の職員とボランティアの協力によるもので、その内容は、神奈川県内の植物の分布と特徴を詳しく紹介している。この植物誌は、植物愛好家や研究者にとって非常に貴重な資料となる。また、植物の分布図や写真も豊富に掲載されている。この植物誌の発行は、植物の保護と研究に大きく貢献している。また、植物の分布図や写真も豊富に掲載されている。この植物誌の発行は、植物の保護と研究に大きく貢献している。

神奈川新聞 (1988.4.4)

植物誌が刊行されてから、地元神奈川県の新報紙上や、生物関係の雑誌等の書評にもたびたび取り上げられた。その中からいくつかを紹介してみよう。

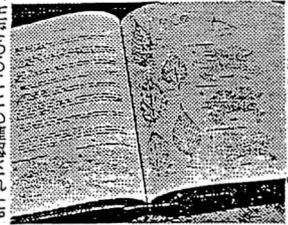
県内植物の 戸籍簿完成

県内に自生する植物の分布を示すに役立つ「県内の植物を丸九年かけて調べた」といふ植物があるかを「神奈川県植物誌」の「調査」調へ上げた点で初めて、調査結果に基き、自生植物(ヨリ科)が丹沢の岩場で健

物は二千八百一十種、帰化植物が六百二十種、合わせて二千八百一十種が確認された。三十年前に県博物館協会の調査より五百三十五種多く確認された。

このうち新品種である「イトスゲ(カヤツリクサ科)」が明らかになったのはハノネなど三十種である。また、神奈川県にしか自生していない「サガミジョウロウホトトギス」(ヨリ科)が丹沢の岩場で健

調査は博物館や学校の先生



サガミジョウロウホトトギス 丹沢の岩場に健在

東京新聞 神奈川版 (1988.3.26)

本を採取
まの植
にはい

風

「神奈川県植物に絶滅の危機が多く認められる。人間の害(ヨリ)を反省すべき時期にきていられたい。植物と金を出していない。果實をばくみ歴史を刻む大地の主たる植物、その現状を調へ基礎資料として後生に託すのは本来、県が責任を持つてやるべき仕事ではないか。」

「植物誌」は「県立博物館」発行になっているので、1980年代の姿を未来に残すものである。県民の命の安全を脅かす植物、その現状を調へ基礎資料として後生に託すのは本来、県が責任を持つてやるべき仕事ではないか。」

「植物誌」は「県立博物館」発行になっているので、1980年代の姿を未来に残すものである。県民の命の安全を脅かす植物、その現状を調へ基礎資料として後生に託すのは本来、県が責任を持つてやるべき仕事ではないか。」

「植物誌」は「県立博物館」発行になっているので、1980年代の姿を未来に残すものである。県民の命の安全を脅かす植物、その現状を調へ基礎資料として後生に託すのは本来、県が責任を持つてやるべき仕事ではないか。」

長洲一二知事に一言

「植物誌」は「県立博物館」発行になっているので、1980年代の姿を未来に残すものである。県民の命の安全を脅かす植物、その現状を調へ基礎資料として後生に託すのは本来、県が責任を持つてやるべき仕事ではないか。」

となりました。県内の植物、約三千種類のうちの六百五十ですから、非常に影響を受けているといえます。か、それだけ土着の植物が圧迫され、変わってきているといわれています。

わからない植物をクイズのように...

飯沢 調査は、その区画へいって生えている植物を採取してこむわけですか。

大場 ええ。そうしませんと、データの信頼性が欠けてしまふんです。飯沢 なんと植物かわからない場合もあるんですよ。

大場 それは、たくさんあります。ここへ持ってきてまして、専門の人間とか、高校の先生とか、セミプロ級の者が何人もいますから、分担して調べるんです。それでも、わからないというのが、実は、また、いへんかあるんです。とくに外国からきたイネ科の植物に、迷宮入りが多いですね。そういうものは、徹底的に調へてみて、結局、びつたり当たるものがない。現在手に入る資料だけでは調へきれないものがあるわけです。そういうのが、毎年増えています。調へていきますね。

飯沢 わかりなかつたものがあつたときに、やはり、うれしいのでしゅね。

大場 クイズを解くと同じで、おもしろいんですよ。また、新しい植物

を見つけたら、ただをおまわり強調し、たかない気があふんです。博物館で自然観察指導をわけていられる、どうしても珍種ばかり追いかけるマニアになりがちなん人が多いのですから。今回は、データを残すという目的があまりないので...

飯沢 テータの整理は、どういう形ではなっているんですか。

大場 最初始まったときは、予算がなく人手も限られてた。とて、一年半の間の調査を、とて整理できないほど、原本が集まってつきました。それでパソコンを自分で買ひ込みまして、パソコンを開発して、データを整理をやったのですけれども、当時は、パソコンが販売された初期で、とて使えるものじゃなかつたんですね。その後、パソコンも進歩したし、プログラムを改良していきましたから、少ない人数で、大量のデータを短い間に正確に計算しよつていこうと、非常にいいです。

面期的な植物誌の出現には数々のエピソードがあつたことがわかりました。

それにつけても多くの人の協力があるが、こんなものを作りあげたのであるが、なんといっても中心になつた大場さんの熱意と執念を私は高く評価したい。この正確で広範囲な標本を上手に利用する人びとの出現を私は待っています。

(一部省略)

対談

飯沢國のひょっこり訪問

第155回



全国で初めて、県内すべての植物の「戸籍簿」まとめた

大場 達之さん

飯沢 『神奈川県植物誌一九八八』をまとめたというのは、画期的なことですね。
大場 ありがとうございます。やるんらば、さん新な植物誌にしようか……。

いま確認されているものだけで

大場 まず、県内を細かくメッシュ(区画)に区切ったことです。神奈川県では、『植物誌』を昭和八年に、その改訂版みたいなものを昭和三十三年につくっているんですが、それは全県一区なんです。ほかの県も、みんなそうです。また、明治以来、植物を調査したデータが、全部、集めてある。ですから、時間からいうと、百年の間があっただけ、いまはなくなった植物も同列にのせているんです。

われわれの『植物誌』は、なるべく現時点の、結局五年間の予定が九年間かかってしまいましたけれども、その間に確認されたものだけをのせようというところにしました。それが特色じゃないかと思えます。

飯沢 今回は、いくつの区画にお分けになったんですか。
大場 百八です。
飯沢 除夜の鐘みたいですね。

大場 煩惱(ぼんのう)の数です。普通は、コンピュータの都合のいいように、緯度・経度とか、地図を真四角に切るんですが、それだと

調査する人が、現地に行っても、境界線が全然、わからないんです。飯沢 目には見えませんがね。
大場 ええ。われわれの実感のある境界線がいいということで、最初は、江戸時代の自然的な村の大きさを……。

飯沢 「字(あざ)」ですか。
大場 はい。そのぐらいが人間のたぐいごとで、字は、だいたい千人・二百戸くらい、約四百坪の範囲に住んでいるという規則性があるんだそうです。高校でも、千人を超えるところとたんに運営がむずかしくなるとか。

飯沢 芝居をうてですね。ホールの収容席が千人を超すと……人間には、そういう限度があるらしいんですね。

百八の区画に分け 中年の主婦も協力

大場 でも、「字」で分けると神奈川県だけで、千を超える区画になるんですね。結局、市区町村の境界線を単位にしました。高い山では、自然環境が違ってくるから、千以上で分け、島も別にしようというので、なんとなく百八になったんです。調査する人はだいたい百四十人、最後まで残ったのが百十四人でした。飯沢 区画の数に近いです。

大場 山のほうには合同調査隊を繰り出しました。調査に九年かかりましたので、平均年齢が上がりまして、大勢で調査していくと、

ゲート・ボールチームじゃないか。って。そのうち中年の主婦が二十七人いまして日曜日やってきて、標本の整理をはじめ、全部やってくれば、とてもできませんでした。勉強はしますし、はじめは植物のことがわからなかった主婦がとんでもない珍しい植物を持ってきたり。

飯沢 まさにワーマン・パワーですね。結果として、新しい発見がありましたか。
大場 非常にありました。神奈川県は調べ尽くされているというのが常識だったんですけれども、今回、何がわかっていなかったかがわかりました。

三十種類くらい新しい植物が出てきたんです。いままでもみんなが見逃して来た植物でした。飯沢 新種とっていいのでしょうか。

外国からの植物が ふえていますね…

大場 種、変種とか、いろいろありますので、新品種、新変種、みんな入れてです。いままでも一種類として見過ごしていたものが、実は一種類に分かれるものだった、というのがほとんどです。日本の植物は、まだまだ、ざっと調べられている段階だと思えます。あとは、土地柄、外国からくる植物ですね。最初の植物誌で外国のものも百種類くらい、二回目二百種類、今回は六百五十種類

赤

旗 (日曜版)

1988年6月26日

○ 神奈川県植物誌調査会編 神奈川県植物誌 神奈川県立博物館(〒231横浜市中区南仲通5-60), 昭和63年3月15日発行。B5版, 1,442頁。頒価10,000円。

あとがきに, “本書は従来の各県の植物誌とは異なる点がかかなりある。それは単に異色であるというだけでなく, 今後地域の植物誌を編纂するにあたって参考に成るべき点が少ないと思われる。”と本書の完成に貢献された大場達之氏は自信を持って述べて居られるが, それは, もっともなことでは, 全県下に居住する150名をこす多数の方々の協力により, 収集された標本は12万点を越えると言うのであるから, とにかくにも大変な苦作であることに相違なく, 紹介者が述べるまでもない。

内容は, シダ植物・種子植物を扱い, 各種の特徴を示す部分図のほかに, 神奈川県を108個のメッシュに分けて分布図が掲載されている。確かに県単位による植物誌の白眉になるものと言って過言であるまい(里見信生)

神奈川県植物誌1988 神奈川県植物誌調査会編。神奈川県立博物館の発行で(この植物誌は神奈川県の特徴ある植物相, 変わりつつある都市域の植物など, 神奈川県1980年代における植物を集大成したもので, 当館と神奈川県植物誌調査会が9年の歳月をかけて調べたもので……)(挨拶状から)。県全域の植物誌としては4回目に当り, 長崎県の3回目, 千葉県, 山形県等の2回目などがあるが, 地域的なフロラ研究調査の最先端を歩む成果といえる。調査の苦心の概要が大場達之氏の記事(p.1413)でうなずける。今回の調査での新植物は30種(変種以下を含む)の由。また近年特に目立つのが帰化植物で新しい35種をあげている。一方横浜は長崎, 函館と共

に, 近代植物分類学の三大窓口の一つであるために植物研究史の面では日本列島の研究史に連なる点で, 研究史(1)を担当された, 小原敬氏の記事に特に興味をおぼえた。また研究史(2)の村上司郎氏の記事は私にとっては牧野富太郎・久内清孝の両先生をはじめ, 親しく交流のあった方々が登場し, なつかしく感じた。(奥山春季)

30.5×21.5cm, 厚さ7.5cm, 1~1442ページ。1988.3.15 神奈川県立博物館発行。希望者は(Tel. 045-201-0926)へ照会されたい。

レポート 日本の植物 No.36

1988年(昭和63年)7月1日発行

日本の生物 2(8) AUG. 1988



神奈川県植物誌 1988

- 同植物誌調査会編
- A4判 1442頁
- 神奈川県立博物館
- 品切(10月再版予定)

日本各地ですでに出版されている地方植物誌のなかで, 本書はもっとも大きくて充実した植物誌である。シダ植物, 裸子植物, 被子植物がエングラの体系で科ごとにとまとめられ, 各種ごとに和名, 学名, 記載, 分布を記す。後の頁の一覧表には分布型も示され, 1315頁以下の総論と共に生態もよく理解できる。神奈川県を108のメッシュに分けて多人数を動員して昨年まで9年間の調査で判明したデータを今まで知られたデータと区別して共に記されている。証拠の標本が保存されているのも心強い。

神奈川県内の自生の, 帰化植物も含めて全種にわたり, 分布図と植物の全図または部分図があり, しかも種の記述とそれらを見くらべられる位置においてあ

り, その配列の苦心, 努力に敬意を表したい。神奈川県にすむナチュラルリストはもとより, すべての植物愛好家にこの本は大歓迎を受けるに相違ない。すべての学校や図書館はこの書を備えて自然を心から愛好する心の養いとしてほしい。多くの人たちの努力の結晶だが, これをまとめた高橋秀男・大場達之氏らの事務局の苦勞をお察する。黙々として日本植物学に貢献される顧問の榎山泰一氏にも感謝したい。神奈川県内の植物, 特に箱根の植物の日本植物学への貢献は大きい。本誌に記された小原敬氏の神奈川県植物研究史は, 日本植物学が神奈川県を舞台に近代化していった点を明らかにして興味深く教えられるところが多い。

徳川時代に出島の3学者とよばれるケンペル, ツェンペリー, シーボルトは偉大な学者, 医者, また偉大なナチュラルリストであった。彼らが夢中になった日本の植物をもっともよく知ることができた舞台は箱根である。私は学生時代, 箱根底倉の湯に泊まり, 主人沢田武太郎氏(1899~1938)の書齋, その蔵書と大型の標本をみたときの驚きが忘れられない。

[神奈川県立博物館〒231横浜市中区南仲通5-60]

木村陽二郎 (東京大学名誉教授)

● 植物誌以降の記録

タシロラン発見—大磯高麗山にて

内田藤吉

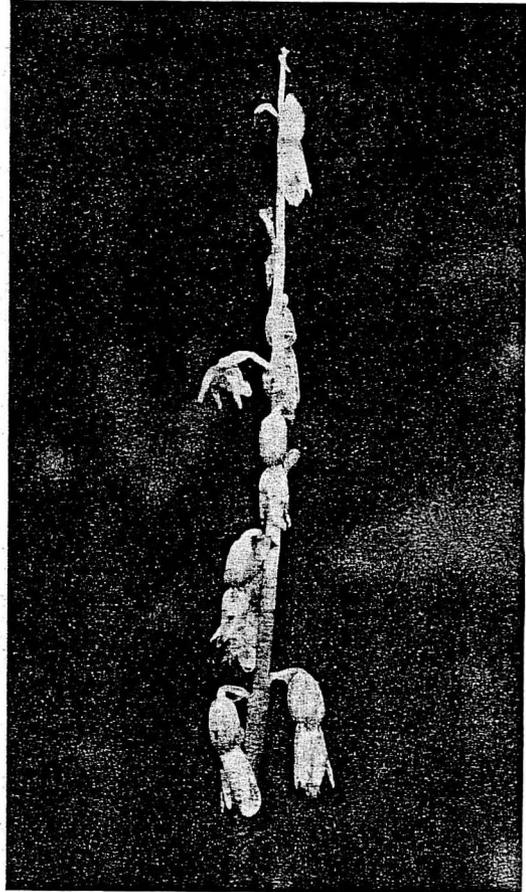
・発見の経緯

7月12日、大磯高麗山へ朝日カルチャー横浜の観察会の下見で行った時のことである。高麗神社（高来神社）から女坂を頂上へ登る途中で、同行の植物誌調査会会員高坂雅子氏が珍しい花を発見したが、私にはさっぱり見当がつかず、1本しかないので写真だけとって後日観察することにした。

帰宅後、数年前横須賀市博の大森雄治さんが観音崎と馬堀で発見されたタシロランではないかと思ひ、その報告（神奈川自然誌資料5号）と「日本の野生植物1」（平凡社）を参照した。さらに大森さんに発見時の印象が、平凡社図鑑と似ているかを電話で確認したところ、その通りと即答があった。翌朝、守矢淳一さんをわざわざ現場にお願いし、確認して頂いた。

・観察の経過（1988年7月）

- 7月12日 高坂雅子氏により発見。写真撮影。
- 13日 変化なし。早朝、守矢淳一氏確認。
草丈24cm。花8個。
- 14日 変化なし。気のせいか、子房が少し大きくなったようである。写真、丹念にとる。
- 15日 変化なし。子房の縞がはっきりしてきたようである。志沢光朗氏を案内する。平塚市博の浜口哲一氏と標本として採るかどうかが、相談する。横須賀市博大森雄治氏に写真を送り、確認を得た。
- 16日 大変化。子房が縦に裂けて、中から種子が出ていた。写真とる。
- 17日 子房の中の種子はすっかり出つくした様子。写真とる。
- 18日 姿なし。登山道のすぐそばであったため、棒でなぎたおされたらしい。根元5mmぐらいが残る。登山道の落葉の中を、丹念に探したら、踏みちぎられたものが2片見つかる。拾い集め、標本にと平塚市博に届ける。



8月4日 朝日新聞神奈川版にタシロラン発見の記事掲載。

・今後の課題

大森さんの話では、毎年同じような場所に出るとのことである。高麗神社（高来神社）の神主さんの話では、数年前に湘南平への途中の山で、写真と同じものを2カ所で群生を見かけたことがあるから、注意してお知らせしますとのこと。6月から7月にかけて、この山の探索を心がければ再発見の可能性はある。城川四郎氏がタシロランなどの珍品は運がよくないと出会えないもので、写真でも貴重なものですよと言われた。来年は運のよい方が出るのではと期待している。

クゲヌマランその後

高橋秀男

・茅ヶ崎市のクゲヌマランが藤沢市に

9月7日、植物誌編纂に当たってクゲヌマランの情報を提供して下さった塩沢務さんからクゲヌマランのことで電話を頂いた。(神奈川県植物誌1988の40頁および480頁にある塩沢努の名は誤植で、大変ご迷惑をかけてしまった。)お話の内容は茅ヶ崎市のあるお宅にクゲヌマランがあり、その生育場所が変わっているから見に来ないかというお誘いであった。またその家が売りに出されているので早晚絶滅してしまうから全部を移植したいという話もされた。私の都合で9日に伺うことに決まった。塩沢さん宅で、藤沢市職員の方も加わって、計5名が2台の車に分乗し、茅ヶ崎市に向かった。到着した所は茅ヶ崎市平和町7-24にある栗原さん宅であった。かって塩沢さんが藤沢市でクゲヌマランを発見した時の新聞記事を見て、わが家にもそれらしきものがあるとの情報を塩沢さんに提供し、確認されたものである。ほかにも塩沢さんは、湘南に幾つかの生育地を存じ上げているようであった。栗原さんは昭和61年頃から庭先に生えていることに気づき、克明に観察し、詳しい記録をノートに記されていた。グラウンドのような硬い土を割って出ているものや濡れ縁の下、マテバシヤクロマツの下などに全部で9本が散らばって生えている。写真撮影の後に、車から発泡スチロールの箱やスコップが下ろされ、株の掘り取り作業が始まった。現在栗原さんは一人で住んでおられ、土地が売れた後は栃木県在住の息子夫婦宅に移住されることになっているという。したがって、クゲヌマランを絶滅から救うために移植することになったのである。栗原さんの庭に植えられているクロマツは、太さ径15cm、高さは4m、毎年開花期には花粉を散らし、庭先は一面がまっ黄色になるという。あちこちに広がって生えている9本とも掘り起こすと必ずクロマツの根がクゲヌマランの根元を横断していて掘りにくいことも知った。ほかに藤沢市の自生地もクロマツ林内であり、クロマツとクゲヌマランの生育地とは密接不離な関係にあることは容易に推定できた。採取された株の移植先は、2株が栃木県の栗原さんの移転先、残り7株は塩沢さん宅でしばらく育てた後に、現在藤沢市が整備を進めている市の施設に移すことになっている。植物誌調査の期

間中は知らせてもらえなかったニュースを紹介したしだいであるが、この情報を茅ヶ崎市がキャッチして、市で保護の対策を立ててもらいたかったと思い、残念でならなかった。茅ヶ崎には他に自生地があるが、今後はこのようなことがないように保護には充分意を注ぎたいものである。

・藤沢市の自生地を調べる

「神奈川県植物誌1988」に載っている分布図の中の証拠標本は塩沢務さんに頂き、グラビアの頁に載せるカラーネガも提供を受けていた。ところが出版の間近になって印刷効果のよいカラーライドを他の方から借用することができたため、残念ながら塩沢さんの写真は使わずじまいに終わった。1988年5月に大場達之、永田芳男さんらとともに藤沢市の自生地を訪れ、写真撮影と調査ができたので簡単に記しておきたい。この自生地はやや硬い砂地の小高い山で、高さが2~3m、径10~15cmのクロマツで構成された明るい林で、その林床には毎年100~123本のクゲヌマランが生えるという。ほかにハマカキランが6月に咲き、今ではすっかり少なくなったショウロも発生する。クゲヌマランは、大きな個体では高さは40cm、葉は7枚、花は23個ほどもつけているものがあり、小さな個体では高さ20cm、葉は5枚、花は3個稀に1個のものもあった。花は半開きで白色、花後には暗褐色に変わる。葉はすべて花序より短く、厚く、光沢があり、ギンランの海岸型のように推定できた。クゲヌマランやハマカキランのほかに、アズマネザサ・スズメノヤリ・ツルボ・ヒメスイバ・チガヤ・マスクサ・アキノキリンソウ・アカメザサ・スイセン・ヨモギ・ヘクソカズラ・オオフタバムグラ・メマツヨイグサ・チチコグサなどが林床に見られたが、一部は雑草として除去しているようである。

三浦半島の追加記録

大森雄治

・腐生ラン3種の三浦半島における新分布地

今夏、山内好孝さんらのご協力により腐生ラン3種、マヤラン、タシロラン、クロムヨウランの新産地を追加することができましたので報告します。特にクロムヨウランは三浦半島では1979年以降初めての記録となりました。その後この標本を手がかりに横須賀市博収蔵標本を整理したところ果実のついた本種を確認することができました。

あわせて報告します。記録は採集地、メッシュ記号、採集年月日、採集者の順です。なお以下の標本はこれまでのようにいずれも横須賀市博物館に収めてあります。

ラン科(226)

27 マヤラン

横須賀市野比(Y0-3, 5), 1988. 7. 13, 大森他
横須賀市西浦賀(Y0-2), 1988. 7. 19, 高橋三郎

41 タシロラン

横須賀市野比(Y0-3, 5), 1988. 7. 13, 大森他
横須賀市西浦賀(Y0-2), 1988. 7. 19, 高橋三郎

72 クロムヨウラン

三浦市小網代(MIU), 1988. 7. 28, 山内好孝
横須賀市浦賀(Y0-2), 1988. 8. 28, 山内好孝
横須賀市野比(Y0-3, 5), 1988. 9. 1, 大森他
横須賀市神明山(Y0-3, 5), 1981. 1. 10, 山本久子

・自生のハマニンニク

三浦市剣崎の海岸でハマニンニク(テンキグサ)が採集されました。現在湘南海岸に生えているハマニンニクは植栽されたものに由来するようです。しかし、房総半島では銚子から外房を経て東京湾入口の富津まで分布している(千葉県植物誌, 1975)ことから推測して、剣崎のものは自生と考えられます。

イネ科(209)

115 ハマニンニク

三浦市剣崎(MIU), 1988. 7. 1, 山内好孝

・アマモとオオアマモの新産地

海中の維管束植物の調査は潜水作業を伴うのでなかなかできず遅れています。今回の標本も打ち上げ採集したもので、地下茎や果実は採れませんでした。

アマモ科(203)

2 オオアマモ

横須賀市観音崎(Y0-2), 1988. 6. 19, 大森雄治

6 アマモ

横須賀市佐島(Y0-4), 1988. 3. 13, 大森雄治

イトバドクゼリモドキについて

山本 明

8月半ばすぎに大和市つきみ野1丁目を歩いているときに、道路わきにセリ科で細裂した葉をつけた見慣れぬ仲間が見つかりました。1株だけで全長60cmほどしかありませんが、白い花をつけ、若い実もついています。はじめはマツバゼリかとも思ったのですが、はっきりした沢山の総苞片が見られますので、そうではありません。工場の近くの道ばたにあったのと、今までに見たことのないセリ科なので、帰化品だろうとは見当をつけたのですが、どうもはっきりしません。ところが、幸いなことに浅井康宏先生にお目にかかる機会がありましたので、標本を見て頂いたところ、イトバドクゼリモドキ(*Ammi visnaga* (L.) Lam.)と同定して頂きました。

イトバドクゼリモドキはヨーロッパ原産で、薬用のために輸入され栽培されたそうですが、野生品は吉川代之助氏が1970年夏に千葉県船橋市で採集したのが始めて、和名は同氏の新称です(植物採集ニュース54)。吉川氏は国立科学博物館の第35回おしぼ展に出品され、その標本(TNS 280760)は現在、同館の標本庫にあります。先日、私の標本と比較したところ一致しました。また、広江美之助先生が1979年に出された「Umbelliferae of World」も見ることができました。

本種は「神奈川県植物誌1988」には記録されておられません。出版以来どなたかが採集されていないければ、神奈川県新産となるのではないかと思います。報告する次第です。

標本を同定して下さい、また種々御教示いただいた浅井康宏先生、並びに標本の閲覧を許された上、文献でもお世話になった中池敏之先生に心から御礼申し上げます。

コアカソもクサコアカソも 神奈川県に2倍体が 確実に分布する

城川四郎

「神奈川県植物誌1988」の572ページでは、矢原先生の実稿でコアカソ、クサコアカソともに、神奈川県では有性生殖型分布の確実な記録はないとされている。これは恐らくその目的をもって神奈川県調査がされていないからであろうと

[REDACTED]

[REDACTED]

[REDACTED]



• 事務局から

1. ○○地区の○○の標本はたしかに博物館に届けたにも関わらず、植物誌には分布点が打たれていない、どうなっているのかという御質問を頂く。苦勞して採集、標本作成、県博への搬入をして下さった標本が生かされず、分布図の充実を欠くことになったとすればご不満ご不審はもっともである。事務局のどの段階かで手落ちがあったかもしれないので先ずお詫びを申し上げておきたい。

ただ標本が持ち込まれてから分布点になるまでは原則として次の段階がある。準備収納、一次同定、コンピューター入力、分類別整理、種別棚収納、種別チェック表記入、二次同定、チェック表修正、コンピューター修正入力。大量の標本についてのこれらの作業量は膨大なものであったが献身的協力の方々でようやく仕遂げられたものであることはご理解願いたい。

2. これからでも植物誌1988に分布点の示されて

いない種類は、博物館に標本を提出した方がよいのかというご質問を頂く。

是非お願いしたい。植物誌調査会の最も重要な目的は今後ともたえず県内植物の調査を継続して、より正確な県内植物の把握に努めることですから。但し、生乾きで、標本に仕上がっていないものや、不完全標本で種の特徴を表わしていないものは特別の場合を除きご遠慮下さい。なお、提出して下さる標本には採集地（メッシュが分かる具体的な地名）、採集年月日、採集者名を記入したメモ（ラベル）を必ず添えて下さい。

—編集後記—

多くの方から原稿を頂くことができ、忙しくも楽しい編集でした。この号だけは、調査に関わった者の思い入れを、前面に出したいと思いながら誌面を作りました。なお、カットは植物誌本編から使わせて頂きました。（浜口哲一）